

光輔

地面が固いせいか甲高いスコップの金属音が大きく響く。

「※○△×\$ 『！？』」

「ええ？なんて？」

心菜の口だけがパクパク動いている。が、何も聞こえない。

俺は手を止める。

「そんなに！掘る必要あんの！」

「あるよ！十年の間に誰かに見つかって掘り返されたらどうすんの？」

「見つかるわけないじゃん」

景子が冷たく言い返す。目が「馬鹿なの？」と言っている。

「あんな？俺たちとおんなじこと考えたやつがおんなじところ掘る可能性もあるかもしれないだろ？」

「ないわ。キンキンキンうるさいし、もうやめなよ」

景子は「ううゝ寒い」とわざとらしく聞こえるように言ってくる。

「だいたいさ、タイムカプセル埋めようって思ったのは、景子の発言がきっかけなんだからな」

「もうそれも何回も聞いたってば」

心菜が俺たちの会話に割って入る。

「もう！なんでそうやってすぐけんかするの！」

俺と景子は瞬時に返す。

「けんかじゃねえよ」

「けんかじゃないってば」

二人の言葉は綺麗にハマる。あまりに綺麗だったので、心菜が笑う。つられて俺と景子も笑う。

「明日で中学生生活が終わるんだよ？景子もそんな冷たく言わないでいいし、光輔はそんなに掘らなくても大丈夫だよ」

いつもの会話。いつものやり取り。俺と景子が言い合いをして、心菜が止める。そんな日常も明日で終わりだった。

○一〇年の元日だった。俺たちがタイムカプセルを埋めようと計画し始めたのはちょうど今年が始まった日、二年

毎年必ず三人で初詣に行くのがお決まりだった。三人で元日の朝に集まって、近所の神社にお参りする。それだけ。

「今年で最後かもね……」

お参りを終えて神社のベンチに腰掛けたあと、景子がボソッと行った。  
俺たち三人はいつも一緒だった。

大阪にある小さな市にある小さな村、百白（ひやくしろ）村で俺たちは育った。  
百白村の人口は数百人ほど。ほとんどが老人。ほぼ全員顔と名前が分かるくらいだ。コン  
ビニにも車で行かないといけない。道路にはしょっちゅう動物が出てくる。田舎も田舎な村  
だ。

村唯一の百白中学校は全校生徒十二人。俺たちの学年はたった三人しかいなかった。  
俺と景子と心菜。

小学校からずっと一緒。クラスも一つで、もちろんクラス替えなんてものもない。イヤで  
も三人はずっと一緒だった。

たとえけんかしてもクラスには三人しかいない。楽しかった思い出も、イヤな思い出も全  
部この三人と一緒だった。

しかも俺以外の二人は女子。俺は同い年の男子の友達はいない。

それがイヤでイヤでたまらないときもあった。思春期のピークみたいな時期は顔を見る  
のもイヤなときもあった。でも、結局この三人しか気を許せる友達はおらず、ため息をつき  
ながら二人と接した。

心菜。腐れ縁三人のうちの一人。ボケーっとしていて、どんくさい。顔を見ればすぐに機  
嫌がいいか悪いか分かる。

黄色いリュックサックがトレードマーク。こんなに目立つリュックを持っているのは心  
菜くらいなので、遠くから見てもすぐに心菜と分かった。

ことあるごとに俺たちにちょっかいをかけてくる。他の学年のやつには可愛いつて評判  
だが、それは一緒にいた時間が少ないから。一緒にいればいるほど、ウザい馬鹿な女度が増  
してくる。

景子。腐れ縁三人のもう一人。こいつもこれまた可愛くない。サバサバしていて「はいは  
い」が口癖。いつも言い合ってきたし、ときには本気でロゲンカもした。まあ結局、お互い  
謝り合って終わるんだけど。

そんなトゲトゲした奴なのに、たまにしんみりすることを言うこともある。それが他の学  
年のやつはツンデレなんて言いやがるが、そんなにいいものじゃない。ただの気まぐれなわ  
がままで。

その「しんみり」が初詣の終わりに出た。

「今年で最後」

俺は徳島の高校へ進学することが決まった。陸上の大会でそれなりにいい成績を収めて  
きたおかげでスポーツ推薦が取れた。俺は勉強が出来ない。高校生活が陸上漬けになるのは  
少しイヤだが、受験勉強はもったイヤだった。

俺はこの村を出る。四月からは寮生活だ。

田舎の村とはいえ、名残はある。でも、いつまでもこの村にいるわけにもいかない。俺の

出した結論は中学卒業とともにこの村を離れることだった。

景子は東京の高校へ進学する。景子の家庭は厳しい。親のスパルタ教育で勉強三昧。景子はバスを乗り継いで塾に通っていた。もちろん成績も優秀。そして、東京の名門私立高校合格を勝ち取ったのだった。

合格の報告を聞いたときは自分のことのように嬉しかった。景子がいつも地道に勉強しているのはずっと見ていた。心菜も目をうるうるさせながら「おめでとう」と言っていた。

東京の高校へ進学。東京の親戚の家で生活をするらしい。つまり、景子も春からこの村を離れるということだ。

心菜はこの村に残る。公立高校の入試がつい先日終わった。おそらく合格するであろうその高校はこの村からでもギリギリ通える。心菜は村に残り高校へ毎朝通学することを選択した。まあそれが普通の選択なんだけども。

三人は離れ離れになる。景子の言う通り、こうして三人で初詣に行くのは今年で最後だろう。

景子の呟いた言葉に心菜は反応しなかった。

神社に静寂が流れる。気まずい。

「……じゃあ、最後になんかするか？」

「なんかって何よ。」

それは俺も知らない。お前が「今年で最後」なんて寂しいこと言うから俺が無理矢理言ったんだろが、と言いたくなる。

いつもなら言ったけど、言えなかった。たしかにここ最近三人でいてもみんなどこか寂しそうだ。心菜は特にそうだった。

俺はまたテキストに言う。

「……じゃあ、タイムカプセルでも埋めるか！」

あれから二ヶ月。俺はスコップを手にしていた。

景子

こいつは馬鹿だ。顔に泥をつけて、めっちゃくちゃ深い穴を掘っている。もう光輔の下半身は穴の下で見えない。

タイムカプセルを掘ろうと言い出したのは光輔だった。光輔にしては珍しく可愛い提案だった。

断る理由もない。私と心菜は快諾した。

あとのことは光輔が勝手に決めた。十年後、二十五歳になったときに掘り起こすこと。学校の裏にある空き地、そこに生えているくすの木の下に埋めること。私たちは「はいはい」と従った。

しばらくすると光輔から便箋と封筒を渡された。

「これ何？」

「未来の自分へ手紙を書こう」

すると心菜は速攻で嫌がる。

「無理！私、手紙なんて書けないもん」

馬鹿な答えに光輔は戸惑う。そこからしばらく手紙を書きたい光輔と手紙を書きたくない心菜の口論が続いた。

「景子はどう思う？」

「どっちでもいいよ」

タイムカプセルって思い出のものとかを埋めるものだと思っていた。手紙も悪くないけど、そんなの十年後読むときめちやくちや恥ずかしいんだらうなって思う。

「光輔だけ書けばいいじゃん、手紙」

「みんなで書くからいいんじゃないか。十年後、三人で掘り返して手紙が二通だったらイヤだろ？」

「別にいいもん」

見てられない。光輔はすぐに言い争いたがる。

「じゃあさ、質問したら？」

ここは私が折衷案を出して、醜い争いを止めなければいけない。

「質問？」

「うん。十年後の自分たちへの質問を書いたらいいんじゃない？それなら心菜も出来るでしょ？」

「さすが景子。頭いい」

心菜が雑に褒める。これもいつもこう。光輔は少し腑に落ち無さそうだったが、結局、十年後の自分への質問を書くことで収まった。

「これってさ、もちろんお互いの質問は見せないよね？」

「当たり前だろ」

心菜の質問にまだ腑に落ちてない光輔が冷たく返す。

誰もいない教室で私たちは手紙（質問）を書いた。

ポケットにその手紙が入っている。寒いからポケットに手を突っ込んで、穴を掘る馬鹿に言う。

「そんなに掘ったらさ、掘り返すとき見つからないよ？」

すると、光輔は私のこの質問を待っていたかのようにニヤリと笑う。

地面に手を置き「よっ」と声をあげ、光輔が穴から出る。リュックを開けると、大きな段ボール箱を取り出した。

「何よ、それ」

私の質問を無視して、光輔は段ボール箱を開ける。見慣れない機械が入っていた。それを取り出し黙々と組み立て始める。

出来上がったのは草刈り機のようなものだった。長い棒の先に丸い円がくっついていて、手元には小さなモニターもついている。

「ねえ、それ何」

すると、光輔はリュックから今度はアルミの缶を取り出した。それを地面に置くと、その上に機械の丸い部分をかざす。

ピーーーーー

高い機械音が鳴り響いた。

「金属探知機」

光輔がドヤ顔で言う。私のため息は機械音に消される。

「これさえあれば、どこに埋めても、どんなに深く埋めても大丈夫！」

「そんなのなんで持ってるの」

「お父さんの趣味」

どんな趣味よ、って言うのも面倒くさかった。

光輔は缶を穴の底に放りなげる。地表からでも金属探知機をかざすと、しっかりと反応するのを確認している。

「よし、埋めよう」

光輔は穴の底に目一杯手を伸ばして缶を取り出す。たぶんクッキーかなんかが入っていた缶だ。缶はかなりかっちり閉まるようで、光輔は力を入れて蓋を開けた。

「手紙出して」

三人は手紙を取り出す。全員同じ封筒。裏に名前が書いてある。それぞれの文字で『十年後の自分へ』と書いてある。何を書いたのかはお互い知らない。

それぞれが手紙を缶の中に入れる。あと、それぞれ自分がいたい思い出のものも入れる。

「やっぱりなんかものとかも入れたらいいんじゃない？」

そう私が聞くと、光輔は驚きながら答える。

「なるほど、その発想はなかった」

こいつはタイムカプセルをなんだと思っているんだ。

持ち寄った「思い出のもの」を見せ合う。

私はレミオロメンのアルバムだった。

「なんで？」

心菜が聞く。

「好きだから」

「じゃあいれたらダメじゃない？」

「もう一枚持ってる」

私はCDは聞く用と保存用の二枚持っている。今回は保存用を一枚、タイムカプセルに捧

げることにした。

「掘り返すのは卒業式の十年後なんでしょ？明日は何月何日？」

「三月九日か」

「だから面白いかなって思って」

ふくん、と心菜は納得した様子。あと、十年経ったときCDというものがまだ使われているのかも気になる。

光輔はフィギュア。たぶんなんとかレンジャーのやつ。小学校のとき、光輔はいつもこれで遊んでいた。そのせいでフィギュアの塗装ははげていてボロボロだ。

心菜はたまごっち。これも心菜は四六時中やっていた。「景子もやろうよ」と何度も誘われたが何が面白いのか全く分からなかったので断った。

「二人とも子供すぎない？」

「十年後見たら懐かしくなるんだよ」

うんうんと大きくうなづく心菜。この二人はたぶんIQが一緒だ。

手紙三通、CD、フィギュア、ゲーム。それらが入った缶を光輔が閉める。蓋を閉めたあと、ビニールテープでぐるぐるに巻く。

「これでよし」

光輔は缶を穴の底にそっと置く。

「埋めるよ？いい？」

私は無言でうなづく。心菜もうなづく。

光輔は山盛りの土を穴に戻し始めた。

「十年後か……」

心菜が聞こえるか聞こえないかの声で呟く。

私は何か返してあげたかったけど、何も返すことが出来なかった。

心菜

光輔は手を真っ黒にしながら土を穴に戻している。

こうして光輔と景子の横顔を近くで見られるのも、もう明日だけ。

なんとなく、この三人はずっと一緒にいると思っていた。でも、この町に残るのは私だけ。四月からどうすればいいんだろって悩むくらい、私は寂しかった。

でも、二人はそうでもなさそうだ。寂しくないのかな？あんまりそういう雰囲気は感じさせない。強がっているようにも見えない。

「で、どうすんの」

景子が唐突に聞く。私にだけに聞こえるような小声で。

「どうすんのって？」

「とぼけんじゃないよ。告白しないの？」

「えっ？」

「えっ？」とは言ったものの、その質問はいつかされるだろうなと思っていた。今されるとは思わなかったけど。

私は無言で誤魔化す。

「誤魔化しても無駄。顔真っ赤だよ。」

景子には私の誤魔化しは通用しなかった。

「光輔は明後日この村を出るの。明日は卒業式。告るんなら、今日か明日。はい、どうする？」  
「どうするって……」

どうしよう。

小さな頃から私の周りに男の子は光輔しかいなかった。景子と光輔と遊ぶのが当たり前。私はずっとこの二人は幼馴染だと思っていた。

「あんた、光輔のこと好きでしょ？」

いつかは忘れた。暑い日だったか寒い日だったかも覚えてない。唐突に景子に言われた。そんなこと考えたことなかった。好きな人が出来た、とかそんなこと。

「なんでそう思うの？」

「だって、放課後ずっと窓から光輔のこと見てんだもん」

そう言われた瞬間は確かに私の体は窓を向いていた。校庭では今日も光輔が陸上部の練習をしている。

「それは……、暇だから見るだけ。暇つぶし」

拙い言い訳を無理矢理呟く。

「あっそう」

景子の返事はそっけなかった。

そのときはそれで終わったけど、それから景子はたびたび私に聞いてきた。

「ほら、また光輔見てる」

それを言われるとき、私は必ず校庭向きの窓の方を向いていた。

よく分かんなかった。漫画とかアニメの恋愛ものは好きだけど、自分が恋愛しているかどうかは分かんなかった。

これもいつだったか忘れたけど、そのことを景子に言った。

すると景子は珍しく声を出して笑った。

「まあ私は心菜が光輔のこと好きなら応援するよ」

景子は時々その話を私にしてきた。冷やかしているつもりなんだろうか？いじっているつもりなんだろうか？でも私は「やめて」とも言えず、いつも誤魔化していた。

たまに夜眠れなくなる。

「私は光輔のことが好きなのかな？」

その答えは出なかったし、そんなこと考えている自分が急に恥ずかしくなったりもした。でも最後は決まって、こう自分に言い聞かせていた。

「どうせずっと一緒にいるだろうし、今は今のままでいいや」

「俺、高校決まったかもしれない」

光輔が教えてくれたのは二学期だった。陸上の推薦をもらったって報告だった。

嬉しかった。光輔がいつも真剣に陸上に取り組んでいるのは知っていたし、なにより友達  
の進路が決まったことが嬉しかった。

でも、その日からまた新しい悩みが増えてしまった。

「今は今のままでいいや」

その「今」が終わる。明日で終わる。

「どうするのって」

景子は光輔に聞こえないギリギリ大きい声で私にもう一度聞く。

光輔は相変わらず穴を埋めている。

「……わかんない」

景子はため息をつく。

「私もこんな早く離れ離れになるとは思ってたよ。でも、いつかはそういう日が来る  
つてのは分かってたでしょ？こんな村にいつまでも残る人なんていないだろうし」

「……………」

「明日、卒業式終わったら告白しよう。決まりね？」

「えええ！？」

私の声に光輔が気付く。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

光輔は気に留めることもなく、穴を埋める作業に戻った。

「なんで景子が決めるの？」

「だってそうしないと告げないでしょ？」

全く持ってその通りだった。

「でも……」

「心菜は言うことだけ考えとけばいいよ。あとは私がなんとかするから」

「えっ？」

「もちろん二人きりにするから。ね？」

景子はにっこり微笑む。

私はうなずいた。うなずくことしか出来なかった。

「よし。終わった」

地面に人の肩幅くらいの直径の円が出来ていた。そこだけ他の地面と色が違う。

「次、ここを掘るのは十年後」

「楽しみだね」

景子は楽しそうに言った。



光輔は学校の時計を見る。

「やべっ。もうこんな時間じゃん。早く山登らないと日が暮れちゃう」

光輔は急いで金属探知機を箱になおしていた。

山に登る、と言つても大したことはない。学校の裏にある小さな山の途中まで登って夕日が沈むのを見ること。

私たちはよく夕方になると山に登っていた。そこで何もしゃべらず夕日が沈むのを見る。沈んだら帰る。それだけ。

中学生になってから光輔が部活で来られなかったり、景子が塾で来られなかったりしたけど、私たちは時々山に登っていた。

それが出来るのも今日が最後。明日の夕方、光輔は忙しいらしい。

……でも。

「心菜はやっぱり行けないのか？」

「うん」

私は今日は山に登らない。登れない。

絶対に外せない用事があった。

光輔

こうして同級生と山に登れるのも今日が最後かもしれない。

というのに、心菜は来なかった。

何度も「行かないのか？」と聞いたが、心菜は首を縦に振らなかった。

結局、俺と景子は心菜と別れた。心菜の黄色いリュックサックが離れていくのを二人で見送った。

「なんで？なんで来れないわけ？」

俺は正直不満だった。

「たぶんなんか家の用事だよ」

そう答えるが、景子も腑に落ちてない様子だった。

心菜が来ないのは珍しい。よっぽどの事情があるんだろう。だから問いただしたりはしなかった。

でも、不満は不満だ。

「そんな不機嫌にならなくてもいいじゃん」

景子が俺の心を察して声をかけてくれる。

「うん」

小さく返した。

俺たちはいつも通りの道で山に登る。幽霊トンネルの前まで着いた。

「あかさ……」

「イヤ！」

景子は俺の言うことを先に読んで断る。

「どうせ、今日が最後だから幽霊トンネル抜けてみない？とか言うんでしょ？」

凶星だった。

俺たちが山に登って目指す場所はちよつとだけ展望台みたいになっている。山が拓けていて、そこから海を一望出来る。ベンチもあるから、そこに座って俺たちは夕日が沈むのを眺める。

そこへの道のりはひたすら階段を上るだけ。俺はたまに陸上部の練習でも使っていた。そのくらいわりと急な階段だった。

でも、一つだけショートカット出来るルートがある。それが今日の前にあるトンネル、通称「幽霊トンネル」だ。

ここを抜けると山の反対側へ出ることが出来る。隣町へは断然早く行ける。トンネルを抜けた隣町側から山に登ると展望台へは圧倒的に楽に登れる。勾配がこちら側と比べて緩やかだからだ。

だけど、このトンネルは簡単なバリケードが貼られていて、今は使用不可になっている。

理由は小さな頃は幽霊が出るからと言われた。昔、子供がこのトンネルに入って行方不明になったらしい。でも、誰もその事件の詳細は知らない。だから本当のことは分からない。そもそも幽霊が出るのと子供が行方不明になったのは別の問題な気がする。耐震の問題があるからとか言っていた人もいた気がする。

定期的に村の話し合いでこのトンネルを使えるようにしてくれ、新しいトンネルを作ってくれという意見は出る。高齢者にとって隣町へ楽に行けるのは嬉しいことだからだ。そういった意見を村長を通じて、市や府にアピールしているらしいが、何一つ相手にしてもらえないらしい。この村の力の無さが分かる。

とにかく、この「幽霊トンネル」には絶対に入るなどだけは親に強く言われている。というのも実は小学生のときこっそり入ったことがある。近所のお兄ちゃんたちに連れられて肝試しをしに行った。それが運悪く大人に見つかって、近所の人に怒られてしまった。なんでそんなに怒るのか分からなかったが、信じられないくらい怒鳴られた。それ以降、幽霊トンネルには入っていない。

そんな因縁のトンネルに入れるのも今日が最後かもしれない。冗談のつもりで景子に「抜けてみない？」言ってみようとした。正直、バリケードも中学生なら簡単に乗り越えられる質素なものだ。

「あんた、あんなに怒られたのにまだそんなこと言ってるの？」

そう言いながら、景子はトンネルの横の階段を上り始める。俺もあとを追う。

「冗談だよ」

「あんなに泣きじゃくったのに」

そうだ。ガキだった俺はずっと怒られて、ずっと泣いていた。

「だから冗談だって」

前に行く景子の顔は見えないがたぶんニヤニヤしているのだろう。景子は泣いている俺を見ていつも笑う。陸上の大会でいい結果が出せずに泣いていたときも景子は「泣いてる」と笑ってきた。さすがにそのときは腹が立った。

景子はそのあとも「あのときも泣いていたな〜」って散々小さい頃のエピソードでからかってくる。

「景子だって、あのときめちやくちや泣いてたじゃん」

俺はやられっぱなしはイヤだったので、やり返す。

「でも、あんときは光輔が悪かった……」

「あれは景子が余計なこと言うから……」

心菜がいらないから俺たちの言い争いを止める人はいない。だけど、俺たちのこのくだらないやり取りも今日はなんだか感慨深い感じがした。

あれもこれも、明日で最後。その寂しさを感じているのは俺だけじゃない。景子も前を歩いているから表情は分からないが、言葉には少し元気がなかった。

俺たちは展望台に着いた。時間もちょうど良かった。あと五分もしないうちに夕日が沈みそうだった。

この展望台を俺たち以外の人が使っているのを見たことがない。屋根とベンチがあるちよつとした休憩所。昔は山頂に売店があったらしく、ハイキングに訪れる人もいたらしい。今はそんな観光客は一人もいない。山頂は何度か登ったことがあるが、今は携帯会社のアンテナが立っているだけで、行っても何も無い。

年月だけが過ぎ、この小さな展望台だけポツンと残された。ベンチは木で出来ているが、もう雨風にさらされボロボロ。屋根もいつ壊れてもおかしくない。

だけど、ここから見る夕日は本当に綺麗だった。俺たち三人が昔、探検隊ごっこをしたときに見つけた穴場だった。それから今に至るまで、時々登っている。

他の学年の友達にはあまり教えたくなかった。別に隠すことではないし、見つけようと思えば簡単に見つかる場所だ。だけど、なんとなく「三人だけの秘密基地」のような気分だった。

「なんか飲もつか」

俺が言うと、景子もうなずく。

二台並んでいる自動販売機で俺たちは飲み物を買う。お小遣いをもらったときやちよつと誰かがめでたいことがあったときは飲み物を買って乾杯するのがお約束だった。誰かが誕生日のときとか、俺が大会で優勝したときとか。

俺はコーヒー。景子はコーンポタージュ。二人とも冬はいつもこれ。心菜はいつもココアだ。

俺たちはボロボロのベンチに座る。このベンチの裏側に三人で落書きしたこともあったっけ。たしか小学生のとき。なんて書いたか覚えてないけど、三人で悪い顔をしながらペン

を走らせた思い出がある。

特に何も言わずに俺たちは乾杯した。

景子

夕日が沈むとあたりはたちまち暗くなる。田舎だから街灯も少ない。ぬるくなったコーンポタージュを飲み切り、私は光輔と山を下りる。

下りる間は普段特に何も話さない。だけど、今日は無言がなぜか気まずかった。やっぱりこれが最後かと思うと寂しいからなのか。

急な階段を気をつけながら降りる。何度か踏み外して擦りむいたことがある。これだけ急だから私たち以外の村の人はあの展望台に行くことが無いんだろう。

「ん？」

階段がもうすぐ終わるといときに光輔が突然声を出す。

「どうしたの？」

「あれ」

光輔が指さす方向を見ると、車が止まっていた。しかも、真っ黒の車。光輔に言われるまで気づかなかった。夜になると見えないくらい真っ黒。

村に住んでいる人が少ないので、住民の持っている車は全部知っている。だけど、こんな真っ黒の車を持っている人を私は知らない。

光輔と一緒に車に近付く。

「クラウンだ」

たぶん車の名前のことだと思う。私は車にはあまり詳しくない。

「誰の？」

「さあ」

やっぱり光輔もそこは分からないらしい。

「せたがや……」

車のナンバープレートの地名が「世田谷」となっている。東京にあることくらいは分かるけど、ちゃんとした位置とかは知らない。

なんて思っていたら、とあることに気づく。

「あれ？このナンバープレート！」

「ん？」

「私の誕生日だ」

ナンバープレートは『9-14』。私の誕生日は九月十四日。

「たしかに」

まあ「だから何」と言われればそれまでなんだけど。光輔はそんなことより、見慣れない車に興味津々だった。

止まっていたのは幽霊トンネルの手前だ。世田谷からなんらかの用事があったこの村に  
来た。よく分からないままトンネルまで来たが、通ることが出来ずに立ち往生している。そ  
んなところだろうか。

でも、運転席にもその周りにも車の持ち主らしき人は見当たらなかった。光輔もぐるっと  
車を一周していたが、誰かが乗っている気配はない。

「ま、行くか」

「うん」

遅くなるともっと暗くなる。私たちはあの車のことが少し気になりながらも、その場をあ  
とにした。

人が住んでいる地域まで帰ってきた。ここまで来たら、街灯も増えて夜でも安心だ。

あと少しで家に着く。光輔ともお別れ、というときに私は人影に気づく。

「タッチじゃない？」

高身長でひよろつとした影。見た瞬間に誰か分かる。

「本当だ」

「タッチ！」

タッチが振り返る。

上杉史也（うえすぎふみや）。私たちの担任の先生。理科を教えてくれている。

あだ名はタッチ。あの有名漫画の主人公と名字が一緒だから。心菜が名付け親だ。名字が  
一緒というだけで、別に双子でもないし、野球も好きではない。

結局「タッチ」が完全に定着してしまい、今ではお父さんお母さんからも「タッチ」と呼  
ばれている。

優しい先生で生徒からも好かれている。三人ともタッチのことは好きだ。他の学年の生徒  
からも好かれている。学生の数が少ないこともあり、タッチと過ごす時間もかなり多かった。  
タッチと初めて会ったのは小学校のとき。百白村は小学校と中学校が隣同士にある。小学  
生のときから中学の先生とも交流はあったし、小学校を卒業しても小学校の先生と交流す  
ることも多かった。

百白村には公園がない。遊ぶとなると、解放されている小学校の校庭になる。そこでドッ  
ジボールやサッカーをしていると少し手が空いた先生が乱入してくるなんてことがよくあ  
った。もう少し都会に住んでいる親戚にこの話しをすると驚かれる。普通、学校の先生はそ  
んなことはしないらしい。

私たちが小学生のときからタッチとは仲が良かった。校庭で一緒に遊んだこともよくあ  
る。私たちが小学校に入学したのと同時にタッチは百白中学校に新卒で赴任してきた。あの  
ときは気づかなかったけど、入学式の日に胸にお花をつけてくれたり、写真を撮ってくれた  
りしたのはタッチだったらしい。

「新人だからずっと雑用させられてたんだよね」

って、中学校で私たちの担任なってからあの日のことを話してくれたっけ。普通は高学年

のお兄さんやお姉さんがやることらしい。だけど生徒が少ない百白中学校はそういった雑用を先生がやらされることにタッチは戸惑ったらしい。タッチは出身はこの村ではない。だけど、もう何年も百白村中学校で働いているので、みんな村の住人の一人って思っているよな気がする。そのくらい親しみやすい先生だった。

タッチは私たちに気がつく。

「佐々木と……福山か」

タッチは私たちのことを必ず名字で呼ぶ。私のことは「佐々木」。光輔のことは「福山」。心菜は「泉」。

タッチはどこかおどおどしている。何か俺たちに見つかったらまずいこともあるのだろうか。

「どうしたのタッチ？」

「いや、なんでもないよ」

なんでもないようには見えなかった。

「君たちこそ何してるの？」

私たちが何か言うのを遮るように、タッチは聞いてくる。

「山に登って夕日見てた」

光輔が答える。

「そっか、気をつけて帰りなよ」

「タッチはどっか行くの？」

今度は私が聞く。

「卒業式の準備がまだちょっと残ってるから学校に行かなくちゃなんだ」

「ふーん」

「じゃあ」

タッチは手を振ってその場を離れた。

## 心菜

……緊張した。

景子と光輔には絶対に見つかってはいけないかった。二人の目はかいくぐれたらしい。

いけないことをしてしまった。だから他の人にも見つかったらイヤいけなかった。それもなんとかクリアした。

「ふう……」

私はベッドの上で紙袋を抱く。これがあれば……

「光輔は明後日この村を出るの。明日は卒業式。告るんなら、今日か明日。はい、どうする？」  
景子の言葉が脳で繰り返される。

今日はもう終わった。まだ三時間くらいあるけど、もう光輔には会えない。

メール？いや、メールで告白は嫌がる人も多いつて聞いたことがある。  
私は究極の二択を迫られた。

明日告白するか。しないか。

そのことで頭がいっぱいになる。

明日になれば、みんなは離れ離れになる。

光輔との思い出はいっぱいある。

中二の夏のこと。

「はいこれ」

私はいつも放課後は教室に残っていた。光輔は毎日部活。景子はたまに一緒に残ってくれ  
るけど、だいたい塾があった。私だけ何もしてなかった。だから一人で教室で自習したりし  
ていた。と言っても、ほとんど勉強なんてしてなかったけど。

ある日のこと。そんな教室でひとりぼっちの私にタッチがなにやら紙を渡してきた。

「何これ」

「宝探ししよ」

四つ折りの紙を開くと、そこにはタッチが直筆で書いた文字があった。

ちゅうけたえさ

上を向いて歩こう

「どういう意味？」

「それは泉が考えるんだよ」

「どうやら暗号らしい。」

結局、私はそれからしばらくの間その暗号とにらめっこした。

「ち、う、う、け、た、え、さ」

何度も何度も口にする。でも分からない。

そんな私を見てタツチはずっとニヤニヤしていた。

「なんで笑ってるの？」

「いや、こんなに夢中になってくれるとは思ってなくて」

たしかに時計を見たら想像以上に時間が過ぎていた。私はこんなに長い間考えていたのか。

「タツチじゃん」

しばらく経っただろうか。私たち二人のもとへ光輔が来る。

「光輔、何しに来たの？」

「え？荷物取りに来たんだよ」

「もうそんな時間！？」

気づけば日も暮れ始めていて、部活動も終わっていた。この中学校には部室がないので、光輔は教室に荷物を置いて部活動に行く。

「心菜こそ何してんの？」

「これ」

私は暗号を光輔に見せる。

「何これ」

「私もよくわかんない」

光輔は二十秒ほど紙を見つめる。

「……た、い、い、く、そ、う、こ。ああ、体育倉庫か」

「ええ！？」

光輔はあっという間に暗号を解いた。

「タツチ、合ってる？」

私が聞くとタツチはうなずく。

「え？なんで？なんで体育倉庫なの？」

『『上を向いて歩こう』ってやつがヒントでしょ？だから、それぞれのひらがなの一つ上を読むの。例えば「ち」だったら「た」。』

光輔はいとも簡単に解き、解説してくれた。なるほど、それで「ちううけたえさ」のひところ上が「たいいくそうこ」になるのか。

「すごいね、光輔」



「全然。こんなのよくある暗号だよ」

光輔は笑いながら答える。

「ありがと。じゃあ一緒に体育倉庫行こ？」

「ええ？」

強引に誘って私と光輔は体育倉庫へ向かう。うしろをタッチも着いてくる。体育倉庫の扉を開けると倉庫には似つかわない白い箱が置いてあった。

私は箱のフタをゆっくりと開ける。中にはキャンディーが一個入っていた。

「これだけ？」

「これだけ」

タッチが後ろから答える。

「え、これなんなの？」

光輔が私とタッチ両方に聞く。暗号を解いて宝探しをするゲームなのは分かる。だけど、これで何がしたいのかは私も分からなかった。

「泉がさ、いっつも一人で寂しそうだから、新しい部活でも始めようかなって」

「部活？」

「部活？」

私と光輔がハモる。

『『暗号部』』顧問は俺。毎週月曜日に暗号を泉に出題する。それを泉が解く」  
タッチはしたり顔で宣言するかのよう言う。

「部活って言っても入部届はいらぬ。ルールもない。どう？入部する？」

私の答えは決まっていた。

「する！」

私の声が体育倉庫に響いた。

あんまり深く考えず答えたが、別にいいや。暗号部。なんだかワクワクするし、たぶん楽しい。入る以外の選択肢は無かった。

私は勢いで隣の光輔にも聞く。

「光輔も入るよね？」

「はあ？」

今度は光輔の声が響く。

「俺は陸上部がある」

「いいじゃん。兼部しょ！」

「……………」

私は光輔の手をつかみ、上へあげる。同時に私のもう片方の手もあげる。

「二人入部します！」

「よし」

「おい！」

結局、私と光輔は「暗号部」に入部することになった。

光輔

卒業式の朝……のはずだった。

いつも起きる時間より早い時間に母親が俺の部屋に入ってきた。

「光輔、大変よ」

どうせ大したことないんだろうなって、もうちよつとだけ寝かせてくれよって、このときは思った。

「莉子ちゃんがいなくなったって」

その言葉を聞いたときはまだ事の重大さが理解できていなかった。

「警察の人が来てる」

俺は今が現実であることを確認しながら、とりあえず母に言われたとおりに着替えた。一階に行くと、スーツを着た男が一人いる。いつも家族でご飯を食べるテーブルに座っていた。

「光輔くんですか」

「はい、そうです」

どうしていいか分からない俺の代わりに母が答える。

「朝早くにすみません。光輔くん、少しだけ話がしたいんだ、いいかな？」

俺は小さくうなずき対面に座る。

「私、刑事をやっています、益川と申します」

益川さんは中学生の僕にも丁寧な頭を下げる。

益川さんはおそらく五十代くらいの渋い男の刑事さんだった。歳を重ねている感じは見取れるが老いている感じは全くない不思議な人だった。なんと言うか、すごく若々しい雰囲気かじみ出ている。

当然益川さんの表情はかなり強張っており、真剣なまなざしをしている。それなのに、どこか優しさも感じる人だった。まだ顔を見て十秒も経っていないが、なんとなくちゃんと「いい人」なんだろうなと分かる感じ。

俺がテーブルにつき、この空気を察したところで益川さんは切り出した。

「さきほどお母さまからも少し聞いたかと思いますが……」

その内容はこうだ。

景子のお姉ちゃんである莉子ちゃんが行方不明らしい。最後に目撃されたのは昨日の夕方。高校から帰っているところを町の人が見かけていた。

自宅には学校用のかばんは置いてあり、自宅には一度帰宅した痕跡が残っていた。佐々木家には昨日は一日中誰もいなかったとのこと。昨日俺と別れたあと景子が帰ったときも家には誰もいなかったそうだ。

部屋からは携帯電話だけがなくなっていた。あとは制服と靴は見つかっていないので、身

につけたまま行方不明になったのではないかと推測されている。

最後の目撃情報が十七時。そこからは一切、莉子ちゃんは目撃されておらず、連絡もついていない。

莉子ちゃんの携帯電話に電話やメールは何度もしたらしい。しかし、電源が入っておらずもちろん返信もない。

景子のお姉ちゃんである莉子ちゃんとは何度も遊んだことがある。高校二年生だ。次の四月からは高校三年生でいよいよ本格的に大学受験の勉強を始める時期だ。景子とは顔は似ているがお姉ちゃんのほうが大人しい。静かな女の子だった。

俺たちは「莉子ちゃん」と普段から呼んでいる。高校も府内の名門私立高校に通っていて成績も優秀。町の人もみんな「頭のいい」「礼儀正しい」という印象を持っていた。

小さな頃はたまに俺と心菜と景子の三人に加わって遊んだ。まだ「先輩」や「後輩」なんて考えが無かった頃だ。歳の違う近所の友達大人数で大縄をしたり、かくれんぼをしたりして日が暮れるまでひたすら遊んだ。

莉子ちゃんが中学校に入学したあたりから一緒に遊んだりすることはめっきり少なくなった。それでもこの田舎だからすれ違うことはよくあった。高校の制服を着て帰宅する莉子ちゃんを何度も見たことがある。

その莉子ちゃんがいなくなった。

俺は少しずつ目が覚めていき、今自分たちの周りでものすごいことが起きていることを実感した。

「昨日、莉子さんを見かけたりはしていないかい？」

「……してないです」

「ちなみに光輔くんは昨日何をしていたか教えてもらえるかな？」

俺はこと細やかに昨日の行動を話した。学校に行ったこと、タイムカプセルを埋めたこと、山に登ったこと、全てを正直に話す。

「その間に何か不審な人物とか見てないかな？」

不審……。 「特に何もなかった」と答えようとした寸前に思い出す。

「車……」

「ん？」

「変な車、昨日見ました」

俺は山に登ったときに見た車の話をした。黒色のクラウン。今思い出すとあの車が何か事件のカギを握っているのではと思った。

一通り話し終えると益川さんは手帳にメモしていた手を止めた。

「ありがとう。実は景子さんからも聞いてたんだ」

……ああ、そっか。そりゃそうだ、景子だってあんな怪しい車を見たら刑事さんに言うに決まっている。

「景子さんが言ったことと何一つ食い違わなかった。そのおかげでこの手がかりの信憑性

が上がったよ」

益川さんはにっこりと俺に顔を向ける。この緊急事態のなかでも冷静に周りを落ち着かせようとしているのが分かった。

「でも車種までよく覚えていたね」

「いや……」

たしかに景子はあまり車には詳しくない。自分も有益な情報を言えたかと思うと少し安心した。もしこの車がこの事件に何か重要な影響を与えるものだとしたら、すぐに解決に向かうかもしれない。

「益川さん。あの僕からいいですか？」

「うん」

「景子は……景子は元気ですか？」

益川さんは少しだけうつむく。

「家にはいるんだけど、かなり動揺してる感じだった。家族全員で昨日の晩からずっとこの辺りを探し回って。で、今日の朝三時に通報があったんだ。五時くらいに景子さんには会ったんだけど、そのときは寝てないこともあって疲れてる様子だったよ」

「莉子ちゃん……莉子さんは家に書き置きとかはしてなかったんですか？」

「全く。家出をするような素振りも全くなかったらしいし、何かに悩んでいる様子もなかったってお母さんが。こんなこと言いたくないんだけど、遺書とかも見つかっていない」

つまり、忽然と姿が消えたというわけだ。

「他に聞きたいことはある？」

「いや……」

この瞬間にもう一つのことを思い出す。

タッチ。あの先生と昨日会ったときは何かを隠しているような、そんな感じがあった。

「あの……上杉先生っていう、僕たちの担任の先生がいるんですけど」

「ああ、それも同じことを景子さんから聞いてるよ」

「そうですか」

昨日のタッチの姿が少し変わったことや、会ったときの時間帯なども伝えたがどれも景子が言っていたようだ。

「まだ学校には行けてないんだ。あとで事情を聞くよ」

俺は少しイヤなことをした気分になる。タッチが何か悪いことをしたとチクったような気がしたからだ。

でも、タッチは何か悪いことをするような人間じゃない、とも思ったけど益川さんには言えなかった。

景子

朝七時。本当だったら起きて学校へ行く支度をする時間。でも今日は違った。

昨日から全く寝ていない。だけど全く眠たくない。不思議だ。

お姉ちゃんがなくなった。

「おかしい」となったのは昨日の夜、二十一時。佐々木家の門限がこの時間だ。そのときはお母さんは怒っていた。時間通りに帰ってこないうえに連絡の一つもない娘に。

お母さんが電話をしたりメールをしたりしても繋がらない。はじめはちよつと心配だったが大したことはないだろうと思っていた。

二十二時。さすがに何かおかしいと思い始める。お母さんは高校やお姉ちゃんがいそうな場所に片っ端から連絡していた。それでも、普段通り高校の授業を受けていたこと以外は何も分からない。お父さんも帰ってきたので、家族三人で家の周りを探した。

このとき、何か親には言いにくいことがあるんじゃないかと思った私はこつそりお姉ちゃんにメールをした。

『何かあったの？電話しようか？』

その返事は未だに無い。そのしばらくあとに電話もしたが、電源が入っていなかった。

結局、日付が回るくらいまで捜索したがお姉ちゃんは見つからず家族三人で帰宅。

お姉ちゃんの部屋を改めてくまなく探したが、置き手紙や何か手がかりになるようなものはなかった。携帯電話がどこにもないことも分かった。

そのあとはお母さんは近所の家を回って、お姉ちゃんの姿を見ていないか聞いて回っていた。夜中に明かりのついている家に頭を下げて聞いて回っていたみたいだ。

お父さんは懐中電灯を持って捜索を続けた。

私は「家にいなさい」と言われたから家にいた。特に何かすることは出来なかった。眠れるわけなかったし、かといって出来ることもない。たまにお姉ちゃんに電話をして、繋がらないのを確認した。ずっとソワソワしていた。

午前三時目前。もう一度家族三人が家に揃い、お父さんが警察に電話をすることを決めた。

夜中にも関わらず警察の人はすぐに来てくれた。パトカーが一台家の前に止まり、中から三人男の人が出てきた。一人はそれなりに歳を取ったベテランな感じがする刑事さん。あと二人はもう少し若かった。

家にあがるとすぐさま事情聴取を受けた。担当してくれるのは益川さんって刑事さんだった。さつき見たベテランな雰囲気刑事さんだ。

どうしていいか分からない私たちにゆっくり話しかけてくれる、優しい刑事さんだった。私たち家族三人は話せることを全部話した。と言っても、私は茫然としていて聞かれたことにしか答えられなかった。

覚えているのは「昨日何をしていたか」を聞かれたこと。私は思い出せる限り詳しく昨日の行動を話した。光輔や心菜と一緒にいたことも。光輔や心菜についても聞かれたので話した。これから取り調べするのに必要な情報らしい。

光輔たちと一緒に過ごしていたことを話している間、あまり母親の顔を見ることは出来なかった。母親は光輔や心菜のことがあまり好きではない。明確に口にするわけではないが、なんとなく嫌っているのが分かる。たぶん私の勉強を邪魔している友人とでも思っているのだろう。さすがにこの状況で何か言われることはなかったが両親の顔はあまり見ることが出来なかった。

お姉ちゃんに関することや家族全員の昨日の行動を一通り話し終えたあと、益川さんはこれからについてゆつくり説明してくれた。

とりあえず「搜索願」を届けることになった。益川さんいわく現時点では何も分からないが誘拐の可能性もあると言われた。

「景子さん。昨日何か不審な人物を見たりしていないかい？」

寝ていないこともあって思考が停止していたが、ひとつだけ「ピン」と思い当たることがあった。

あの車だ。光輔と山に登ったときに見たあの車。

私は車の話を益川さんにした。ずつと緊張状態で口もカラカラだったから、話すのに苦労した。しどろもどろになりながらも、私はナンバープレートのことも伝える。

「どうしてそこまで覚えてるんだい？」

「誕生日だったんです、私の。それで光輔と……光輔くと話題になったんです」

益川さんは手元の手帳にペンを走らせる。かなり有益な情報ではないだろうか。もしこれが「誘拐」だとしたら、犯人が犯行に使った車の可能性だってある。

「他には何か怪しい人やものは見ていないかい？」

昨日の自分を必死に思い出す。一人だけ気になる人を思い出した。タッチだ。

昨日会ったとき、タッチは何か変な様子だった。タッチは前にお姉ちゃんの担任だったこともある。ひよつとすると何か関係があるのかもしれない。

タッチに余計な容疑がかけられるのは辛かったし、そもそもタッチが悪いことをするよな人ではないことも分かっている。

でも、私はタッチと会ったことやそのときの様子を益川さんに伝えた。

「ありがとう。またあとで学校にも行くよ」

益川さんはほんのちよつと顔を緩めて私に言ってくれた。少しだけホっとした。

村がどんどん明るくなる。日は完全に昇りいい天気の朝だ。本当だったら卒業式の最高の朝のはずだったのに。

どうなるんだろう、卒業式。言いたかったけど、言える空気ではなかった。お父さんも母さんも目の焦点が定まっていない。

私の携帯電話が鳴る。光輔からの着信だった。私は電話に出る。

「もしもし」

「もしもし……大丈夫か、景子」

「……うん」

大丈夫ではなかったけど、そう答えるしかなかった。

「良かった。とりあえず声が聞けて安心した。とりあえず、俺に出来ることがあったらなんでも言ってみよう」

電話越しだけど光輔も混乱しているのが分かる。声だけでも相手の表情が想像出来るのは長年一緒にいたせいだ。光輔はそれでも私を安心させようとしてくれているのが分かる。

「ありがとう」

「うん。とりあえず、自分に出来ること、俺はするから」

「うん」

「じゃあ」

電話を切ると、お母さんも家の電話に出ていた。

しばらくして切ると、お母さんはゆっくりと言った。

「卒業式、無くなるかもって」

「え？」

「校長先生から。先生もどうしていいか分からないって。でも、今は家でゆっくりしてほしいって。状況を見ながらまた連絡しますって」

お姉ちゃん。お願いだから帰ってきて欲しい。今なら間に合う。

私はただただそれだけを願った。

## 心菜

卒業式二日前。

「これで俺も泉も暗号部引退だ」

「え？」

「これが暗号部最後の暗号」

タッチがあの日のように暗号を紙に書いて渡してくれた。だけど、こうして宝探しごっこが出来るのもこれが最後らしい。

暗号部を始めた最初の方は私だけの力で解けないことが多かった。そういうときは結局教室に戻ってきた光輔に見てもらおう。

光輔はしばらくじっと眺めたあと、だいたい数分で暗号を解く。私が何時間もかけて考えていたのに。

それが悔しくて悔しくてたまらなかったのも、私はいつも光輔が部活終わりに教室に来るまでに解くのが目標になっていた。

中三になったあたりから、私の解くスピードもあがった。光輔が来る前に暗号を解き切ることも多くなった。

でも、最近受験勉強をしなくちゃいけなかったからタッチも暗号を出してくれなかつ

た。その代わりに私が苦手なところをマンツーマンで教えてくれたりした。

「タッチ、暗号は？」

「受験が終わるまで我慢」

何度も何度もねだったがタッチは受験が終わるまでは勉強モードだった。仕方がない。私も暗号なんかで遊んでいる暇なんてなくて勉強しなきゃいけないことは分かっていた。

そして、やっと受験が終わり、学校も卒業式を残すのみとなった今日。タッチは約束通り暗号を出してくれた。

紙を開くといつものタッチのお世辞にもうまいとは言えないイラストが描かれている。



数式のようなものときかさまに描かれた牛。

私は黙り込む。考えるときはいつもこうだ。

「最後だからめっちゃくちゃ難しくしといた」

「え〜〜？もし分かんなかったらどうするの？」

「まあ福山なら解けるだろ？」



なんとなくだけでなく、タッチは私が光輔のことが好きなのが分かっているみたいだった。直接は言わないけどやんわりと光輔の名前を出す。そして、ほんのちよつとにんまり笑う。そのたびに恥ずかしいような嬉しいような複雑な気持ちになる。ちよつとだけ怒りもある。かといって言いがかかることも出来ない。それで余計に腹が立った。

いつもなら部活終わりの光輔が教室にやってきて暗号を解く。だけど、今日はそれはない。光輔はとつくの昔に陸上部を引退している。高校でも陸上を続けるから、たまに校庭で走っているのを見かける。けど前みたいに練習終わりに光輔が教室に戻ってくるなんてことはもうなかった。

つまり、もし私がこの暗号を解くことが出来ず光輔の力を借りるとなったら、私が直接光輔に暗号を見せにいかなきやいけない。

……それはイヤだ。

別に普通に見せればいいんだけど、やっぱり悔しい。光輔はきつとももの数分で簡単に解くだろう。最後の最後でそれはイヤだ。

私はいつも以上に力を入れて、最後の暗号と向き合った。

「まあもし福山も解けなかったら……」

「解けなかったら？」

「卒業式に答え言うよ」

タッチはニコつと笑う。

それはもつとイヤだ。絶対にイヤだ。完全に敗北になる。

自分の力だけで解く。私はタッチのその言葉をもらった瞬間からひたすら暗号解読に集中した。

数時間経過しただろうか。……分からなかった。

「また明日」

タッチと別れるときはとにかく憎い顔に見えた。だけどちよつと久しぶりにこの感じを味わえたのはまんざらでもなかった。

卒業式前日。昼も夜も暗号をぼんやり眺めていたけど、なんにも分からない。

タッチに答えを教わるのだけは避けたかった。散々悩んで、暗号は解けなくて、もがいてもがいて……。出た結論はこうだった。

明日光輔の力を借りよう。

そう思い、暗号の紙をカバンにしまつて私は眠りについた。

次の日。結局、卒業式は中止になった。

景子のお姉ちゃん、莉子ちゃんがいなくなった。

私のところにも刑事さんが来た。色々と質問をされた。けど、何を話したかあんまり覚えてない。少し嘘もついた気がするけど、たぶん大したことはないと思う。

そのニュースは瞬く間に村全域に広がった。そして、みんなびっくりしていた。

あの莉子ちゃんが自分で家出をするような子ではない。誘拐されたんじゃないか、という

のが村の人の考えだった。

私はどうすることも出来なかった。景子に声をかけてあげたかったけど、なんて言えばいいかわからない。だから、何もしなかった。

光輔のことも気になった。ただ私が声を聞いて安心しただけだったかもしれない。けど、電話をする理由がなかった。

結局、昼過ぎに卒業式の中止が決まった。お母さんが学校からの電話でそう決まったと教えてくれた。

ショックだった。どうして？どうしてこうなったんだ？私の行動は全て無駄になってしまふのか？

景子のことも心配だったけれど、自分のことばかり考えてしまふ。こういうとき自分という人間がイヤになる。

私は自分の色々な気持ちを整理することが出来ないまま卒業することになった。光輔に想いを伝えることも。暗号部最後の暗号の答えも。

校長先生は卒業式の延期なども考えてくれた。だけど、景子は事件のことと四月から東京に住むことでそれどころではなかったし、光輔も卒業式があつたはずの日の翌日には村を離れていた。

「泉さん一人だけでもやらないか」と言ってもらえたが、そんな卒業式は私にとって何の意味もないから断った。

光輔と景子とはタイムカプセルを埋めたときにしゃべったのが最後。それっきり、光輔は徳島へ、景子は東京へ行ってしまった。

私は二人に今度会ったときなんて話せばいいかわからないし、なんとなくもう会えないような気もしていた。

最近は三人でいてもずっと寂しい気持ちしか出て来なかった。それなのにあの二人はそこまで寂しそうな素振りも見せず、いつも通りだった。きっと二人にとって、三人が離れ離れになることはそんなに大きなことではないんだろう。

私だけだ。私だけまだ大人になれてない。景子と光輔は私たちがいなくても生きていけるけど、私だけがあの三人とずっと一緒にいたいなんて甘えた気持ちでいるんだ。

二人に「さよなら」が言えなかった。いつも自分のことだけ考えて生きてきた私への罰か何かだろう。これはきつと。

村に一人残された私は中学校までの思い出は胸の奥に封印することにした。携帯電話の番号とメールアドレスも変えた。二人の連絡先も消した。

もういい。私はこの村で一人で生きよう。そう思った。

莉子

私はいいい子だった。

「莉子ちゃんは偉いね」

「さすが莉子ちゃん」

「莉子ちゃんは将来立派な大人になるんだろうなあ」

私がずっと言われてきた言葉。周りから常に期待される。いい高校に行って、いい大学に行って、いい会社に就職して……。そんな未来を描いて生きてきた。

いつからだろうか、それが辛くなったのは。いつからだろうか、未来を描くのが苦痛になったのは。私はいつの間にか無理矢理未来を描こうともがいていた。

いい成績を取っても誰も褒めてくれなくなった。それが当たり前でしょ？って言われているみたいだった。

「また佐々木が一位か」

クラスメートにそう言われるのも、昔は誇らしげだった。でも今は嫌味にしか聞こえない。もう今は私の周りにいる人は全員敵に見えた。

逆に成績が落ちると怒られた。どうして勉強しなかったんだって。私がどれだけ勉強しているかもしらないくせに。

「佐々木どうしたんだ？」

先生も平気でこう言ってくる。それが私にとってどれだけ辛いことかも分からないくせに。

昔は勉強は嫌いじゃなかった。勉強すれば親が喜ぶ。勉強すればテストで良い点が取れる。勉強すれば褒めてもらえる。勉強は気分が良くなる楽しいものだった。

「将来何になりたいの？」

よく聞かれる質問。私は昔から「わかんない」と答えていた。言葉の通り分からないからだ。

中学生になって少しずつ私も大人に近づいた。近づけば近づくほど、心の中の不安が大きくなった。

私は将来何になりたいんだろう。一体何のために勉強しているんだろう。

それでも勉強すればきつと何か見つけられる。そう信じて勉強し続けてきた。常に成績を落としてはいけないプレッシャーと自分の中の不安と戦いながら。

今思えばずっと誤魔化してたんだと思う。大丈夫、自分はいい子なんだから、真面目なんだからって言い聞かせて誤魔化していた。

だけど、それが出来なくなった。

高校生になったある日、突然机に向かうのが辛くなった。

「私は何のために勉強しているんだ？」

その質問に答えることが出来ずに。ペンを持つ手が止まった。

でも勉強をしなかったらテストで点が取れない。すると、親に怒られる。

私はその恐怖でしか動くことが出来なかった。モチベーションも目標もない。ただただ怒られたくないという気持ちだけで机に向かい続けた。

苦しい。いつまでこの生活が続く？いつかはこの家を出ていくかもしれない。だけど、いつまでもいつまでも私は「いい子」でい続けなければいけないのか？一生？

歯を食いしばってペンを持つ手を動かす。この苦しみから抜け出したくなった。

誰でもいい。誰か私を助けて欲しい。私は小さなSOSを出した。

誰も私のことなんて助けてくれやしない。そんなこと分かっていた。私より苦しんでいる人なんて世界中に山ほどいる。私なんて……。

高校生の夏休み。私の出した結論は死ぬことだった。

遺書も書かずに突然死のうと思った。そりゃみんな悲しむだろう。「なんで？」って。だけど、無理矢理未来を描くのが苦しいなんて、きっと誰も理解してくれない。私がこんなに苦しんでいるのだから、みんなも苦しめばいい。なんで莉子は死んだのかって苦しめばいい。そう思った。

死ぬ方法を携帯電話で調べる。どれもこれも辛いものばかりだった。失敗したら後遺症が残る。周りの人にも危害が及ぶ。実際に後遺症が残った人のメッセージなんか載っている。結局、最後はこう書かれている。自殺はやめよう。

違う。私が求めているのはそんなことじゃない。心の相談室みたいところへの電話番号が欲しいんじゃない。脅されて自殺を止めてほしいんでもない。

私はただただ楽になりたい。それだけなのに。死ぬ怖さとそれでも死にたいという気持ち揺れ動く。それとともに時間は流れ続ける。大学受験はいつかやってくる。これから逃れるのは絶対に無理だ。

どうすればいい。私はどうすればいい。そんな私に手を差し伸べてくれる人がいた。私の発していた小さなSOSに気づいてくれる人がいた。

「僕なら君を楽に出来ると思うんだ」

突然私に差しした一筋の光。もう限界まで追い詰められていた私にとってそれは奇跡としか言いようがなかった。

私にとって彼は救世主だった。何も疑うことなく彼の言うことを信じた。

楽になれる。彼についていけば楽になれるんだ。

「いいのか？」

運転席の彼が言う。

「うん」

「僕がエンジンをかけたなら、もうここはお別れだ。いいんだな」

あまりに大事な質問だった。「うん」と答える以外の選択肢はなかった。だけど、本当にこれでいいのかとささやく自分もいた。

家族や妹はどう思うだろうか。村の人はどう思うだろうか。

ここで「うん」と答えたら、もう絶対に過去に戻ることは出来ない。

私はここまでの人生を捨てる選択をした。そしてこの人の言うことを信じることにした。

この人なら私の望んだとおりにしてくれる。

「うん」

「オッケー。大丈夫。それで大丈夫だよ」

彼は安心させるように私にそう言ってくれた。

車の大きなエンジン音が響く。真っ黒の闇の中で真っ黒な車が静かに動き始める。彼は大きくハンドルを切った。

ゆっくりと車がこの村に背を向けて走り出した。

なぜか分からないけど涙が出てきた。「これでいい」何度も何度も自分にそうつぶやく。

「はい」

彼がペットボトルの水を渡してくる。

「飲みな」

私はそっとキャップを空けて水を飲む。緊張で喉がうまく開かないけれど、なんとか押し込む。

視界は少しずつ活気のある町並みへと変わっていく。何もない田舎の面影が段々と減っていく。

私は私を捨てた。

二〇一八年、年末。年を越せば二〇一九年。あの事件から九年が経とうとしている。

俺は今は二十四歳。完全に社会人となってしまった。

卒業式をやることが出来ずに中途半端に去ってしまった、俺たちの百白中学校。それが廃校になると親から連絡があった。

あの事件があつて、学校は世間の注目の的となった。

俺は卒業式があつたはずの翌日にあの村を離れたが、本当にそれで良かったと思つていない。

学校にはマスコミが押しかけ、村は今まで見たことないくらい人が溢れたらしい。俺も徳島の寮で何度もニュースで地元が取り上げられているのを見た。

景子の家にもしつこくマスコミが来たらしい。俺のお父さんやお母さんもインタビューを受けた。

ただでさえ友達のお姉ちゃんがいなくなっているのに、加えてそんなマスコミの人たちを見たら、俺だったらストレスがたまりにたまっていたと思う。

マスコミは「誘拐」事件として、あの事件を扱った。

俺と景子があの事件の前日に見た黒い車。あとから益川さんから直接聞いたのだが、盗難車だったらしい。盗難被害にあった車の持ち主は見つかったが、莉子ちゃんとの接点はもたらん無く、事件当日のアリバイもあった。益川さんに持ち主の写真を見せてもらったが、全く見たことがない人物だった。名前もちゃんと覚えていない。

その盗難車はあの日以来どこにも見つかっていない。Nシステムと呼ばれる高速道路などに設置されているナンバープレートを読み取る装置があるらしい。全国のそれを調べたが「世田谷9・14」のナンバープレートは見つからなかった。

村周辺の防犯カメラなどもくまなく調べた。それらしき車が写っているのは発見されたが、事件の核心をつくような映像は無かった。事件以降、車の行方を追っているが、車の目撃情報すら八年以上一つも無い。

ただ、盗難車があの日、幽霊トンネルにいたという俺たちの情報はやはりかなり有効だったらしい。その情報をマスコミが掴むと、その車で犯行が行われたのではないかと推測された。結果、この事件がニュース番組で扱われるときは「誘拐」事件と表現された。

胡散臭い大人たちが「誘拐」だの「遭難」だの、ひどいときは「神隠し」だのとテレビで言っているのを見るのは本当にうんざりだった。

俺はというと鳴かず飛ばずの学生生活だった。高校生になって最初の大会こそ全国大会の決勝まで行った。しかし、そのあとは膝の故障に悩まされて練習もままならない日々が続いた。辛いリハビリを何度も乗り越えて復活しようとしたが、そのたびにまた違う場所を故障。結局、高校生は最初の大会が一番いい成績だった。

それでも陸上を諦めきれなかった俺は嫌いだった勉強に力を入れた、一般入試で東京の体育大学に入学した。陸上部に入って、もう一度這い上がろうとした。だけど、レベルの差は歴然で練習についていくのがやっと。古傷を再び痛めたりと踏んだり蹴ったりだった。

大学で何も成果を残せないまま卒業。そのまま東京の普通の企業に就職した。

あの日の事件のことは、やっぱり日に日に風化していくのを感じた。自分自身、ふと忘れていたときも多々あった。

でも、たまに寝る前に脳裏に莉子ちゃんの顔が浮かぶ。

自分が出来ることはやったつもりだった。益川さんはかなりいい人で俺のような素人の話も全部聞いてくれた。時々、電話もくれる優しい人だった。

あの日挙動がおかしかったタッチこと上杉先生。その後重要人物として事情聴取したそうだが、事件が起こった時間帯にはアリバイがあった。

「どんなアリバイがあったんですか？」

俺は電話口で益川さんに聞いた。しばらくの無言があったあとにこう言われた。

「それは言えない」

タッチが何か悪いことをする人ではないということと、益川さんへの信頼はあったので、あの日のタッチは事件に関係ないと俺は信じた。

中学校を卒業してからもタッチとはたまに連絡を取っている。大学入学などの報告をする。「おめでとう」とメッセージをくれた。景子とも連絡を取っているらしいが、やはり心菜とは連絡はつかないらしい。

莉子ちゃんが唯一、部屋から持ち出したとされる携帯電話。

「あれのGPSと違って調べられたりしないんですか？」

高校の入学式直前にふと思ったので、益川さんに電話で聞いた。俺の考えはもちろん警察内でも出ており、それは捜査済みだった。

「調べただけど、最後に形跡があつたのは百白村の山の中だったんだ。君たちが車を見た付近で最後の信号を観測していた。だけど、それ以降は全くない」

「つてことは、あのあたりに携帯が落ちてたりしなかったんですか？」

「もちろん警察数百人を投入して、あの山全域を搜索したよ。でも見つからなかった」

それから何回か携帯電話についても聞いてみたけど、進展は無し。

益川さんはあそこで電源が切られて、そこからずっとオフのままどこか遠くへ持ち出されたのではないかと言っていた。莉子ちゃんが一人で失踪していたとしても、何者かによって誘拐されていたとしても、あの村とは離れた場所で携帯電話は処分された可能性が高いとの見方だった。

つまり、事件は完全に迷宮入りしていた。

ニュースも四月くらいまでは連日取り上げていたが、少しずつ事件の報道は減った。

俺も高校生のときは益川さんと頻繁に連絡をとっていたが、それも減っていった。高校生のときはまだ陸上かなり熱があつたので、学年が進むにつれて少しずつ中学生までの思い出や事件の記憶が薄れていった。

景子とは高校一年生の夏休みあたりに初めて連絡することが出来た。事件のことを話するのは少し気が引けた。最初は他愛もない会話をしたと思う。そのとき景子自身は予定通り東京の高校へ進学し、勉強に励んでいると聞いた。

お互い高校生活が忙しく、ろくに連絡は取っていなかった。

今はそのまま横浜の大学に進学したらしい。合格したときに電話はした。だけど、そのときも「おめでとう」くらいしか言えず、詳しい生活の状況なんかは聞けなかった。今どこに住んでいるのかも知らない。

成人式も景子はいなかった。無理もない、地元に戻るの辛いところがあるだろう。

心菜はというと、もつとひどい。完全に音信不通になった。

メールアドレスも変えたらしく、電話番号も繋がらない。成人式もいなかった。今どこで何をしているのかすら分からない。

再来年、俺と景子と心菜はタイムカプセルを掘り返す予定だ。だけど、このままだとそれすら出来そうにない。

まあこんなものなのかもしれない。寂しい気持ちはあるけれど、でも俺は俺で高校や大学で新しい友達をそれなりに作ったし、二人もたぶん何かしら新しい環境で暮らしているは

ずだ。日々を過ごせば、中学校の思い出なんて忘れていくに決まっている。

事件も解決の糸口も見つからない。そうなると、事件はただただ「イヤな思い出」となる。それを忘れていくのは自然なことだろう。

でも、でも何か心に引っかかるものがある。

満員電車で揺られているときとか、トイレで個室にいるときとか、ふとした瞬間にその「引っかかり」は思い出す。事件のことなのか、三人との思い出なのかは分からないけど、何か引っかかるのだ。

そして、今がそのときだ。

何でもない会社からの帰り道。空いてはいないが混んでもいない電車。俺はドアにもたれかかってぼんやり町の風景を眺めていた。

「学校無くなっちゃうんだって」

久々のお母さんからの電話で報告された。

正直、そうなる日が自分が生きている間には来るだろうとは思っていた。ただでさえ俺たちのときも少なかった百白中学校の全校生徒は、今は指で数えられるほどになっただけだ。

中学校が廃校になるのも、あの村が無くなるのも、そう遠くない未来の話だと思う。

廃校と言っても校舎を取り壊したりするのだろうか。親に電話越しに聞いたが「分からない」とだけ返ってきた。

タイムカプセルは学校の裏の空き地に埋めてあるから、たぶん大丈夫だろう。

廃校になるからと言って、自分の生活にはなんら影響がない。ただ寂しいだけ。

でも、その報告を受けてから、また事件のことや中学生の思い出が心から離れなくなってしまった。

たまたまなのかもしれないが、母親から電話があった翌日、益川さんからも電話があった。「やっぱり次の三月で辞めることにしたよ」

益川さんも定年だ。

事件が発生したあの日、初めてみた益川さんはまだまだ若さがあった。

あれから八年以上の月日が流れている。そりや益川さんも歳を取るに決まっている。

もう警察には益川さんしか頼れる人がいない。その頼れる人が警察からいなくなる。だから焦っていた。

ほぼ止まっている事件の捜査の針が完全に止まってしまふ。俺たちは莉子ちゃんの方方を知ることが出来ずにこの事件に負けてしまふ。

絶対にそれだけはあってはならない。

でも、どうすればいい？俺は何をすればいい？

そのの繰り返し。特にお母さんと益川さんの電話があったときからはずっとこの繰り返しだった。

頼むから何か事件解決の糸口が見つかってほしい。



俺は心の中で毎日祈っていた。

その成果が出たのだろうか。俺は信じられない光景を目の当たりにする。ぼんやり眺めていた電車からの風景。駅が近いからかなり減速している。ボロボロの二階建てのアパート。その廊下に黄色いリュックサックを背負った女性がいる。

「心菜？」

周りのお客さんは突然俺が声を出したからびっくりしただろう。でも、声が勝手に漏れるほど驚いた。

間違いない。アパートの廊下を歩いていた人は心菜だ。

電車が駅に停車するやいなや俺は電車を飛び降りた。

景子

「どうしてラーメン屋さんに轉身されたのでしょうか」

高級ブランドで全身固められた服。高そうな腕時計。そして、なにより自信がみなぎっている顔。

早見徹という、ギラギラとした男と私はカフェにいた。

ダメだ。この人は苦手だ。早く帰りたい。

だけど、そういうわけにはいかない。なぜなら今は仕事だからだ。

物心がついたときからずっと勉強ばかりしてきた。親の影響だ。

お母さんが決めた塾に通い、お母さんが決めた高校に合格し、お母さんが決めた予備校に通い、お母さんが決めた大学に合格した。

もちろん感謝はしている。人生のレールを大体敷いてくれたのは紛れもなく両親だ。

だけど、同時に憎んでもいる。十代の青春の時期を、塾に長時間かけて通わされたり、高校生で寮生活を強いられたりと色々苦労したからだ。

高校生になったときくらいから、親からのプレッシャーはさらに大きくなった。

お姉ちゃんが失踪した。いつも通り「行ってきます」と朝家を出ていってから二度と帰ってこなかった。

自宅から無くなったのは携帯電話だけ。その携帯電話も自宅近くで最後のGPS信号を受信したつきり見つかっていない。遺書や書き置きの手紙も見つかっていない。

そのせいで私の中学校の卒業式は中止になった。

私は友達が少ない。口もそんなに良いほうじゃないし、周りからは冷たい人、怖い人によく言われる。そんな私といつも一緒にいてくれた友達が二人だけいた。

光輔と心菜。この二人と過ごす最後の日が卒業式になるはずだった。

結局、最後に「さよなら」も言えず、光輔は村を出た。心菜とも話したかったけど、タイミングが合わず、今度は私が上京するために村を出た。

光輔はたまに連絡をくれる。けど、決まって私が忙しいときに電話をかけてくる。だから落ち着いて話したのは卒業以来全くない。

でも、実際落ち着いて話をしたところで何話せばいいんだろう。今更会うのも気まずい気がするの私だけなんだろうか。電話がかかってきたとき、なぜか冷たく返してしまう。本当は今どこに住んでいるのかとか聞きたいのに。

心菜は完全に音信不通になってしまった。なんとも言えないが心菜が私たちに会うのを拒んでいるのはなんとなく分かる。

心菜が光輔のことが好きなのは一目瞭然だった。卒業式にそのケリをつけるはずだった。だけど、こうなってしまった。

心菜はあの日のまま何も整理が出来ずにずっと今も生きているんだと思う。整理するのは怖い。でも、ちゃんと光輔と私と「さよなら」がしたい。でも、私にはお姉ちゃんがいないとなったことを思い出してほしくない。そうやって、迷いに迷って私たちともう会わないことを決めたんだと思う。心菜なりに無理矢理整理したんだろう。

私はお姉ちゃんがいなくなって、卒業式が無くなって、大混乱のまま東京に来た。

最初はテレビでずっとあの事件のことが取り上げられていた。私はそれを極力見ないようにした。

東京でも関係の薄い友達は何人か出来た。だけど、この事件で失踪した人の妹であることは黙っている。言ったところで私にメリットが何一つないからだ。

村とはまるで違う環境で暮らしていくなかで、私は徐々に過去のことでも悩むことは少なくなかった。もちろん、事件はどうか解決してほしいと思っている。

でも本音はもう諦めていた。

お姉ちゃんはまだ帰ってこない。それが答えだ。そう信じてるのが一番楽だ。

大丈夫だよ、解決するよって言っている自分も心の中にある。でも、事件のことを考えれば考えるほど苦しむ自分がいた。だったら諦めたほうが楽。

その気持ちに追い打ちをかけるような出来事が立て続けに起こった。

まずはお母さんからの着信。私たちの中学校が廃校になるらしい。

光輔と心菜と過ごしたあの校舎や教室がなくなる。寂しいものは寂しい。

じゃあ、あの二人となんとか連絡を取って最後にもう一回学校へ行くか？

私は行きたい。でも、現実には難しいだろう。

学校の裏の空き地に埋めたタイムカプセル。もちろん私は覚えている。あれも本当に掘り起こす日が来るのだろうか。二人は覚えているのだろうか。

たぶん、無かったことになるんだろうなって、そんな気がしていた。

もう一つ、先日着信があった。益川さんからだ。

益川さんは私たちに親身になって接してくれた。時折、私のことを心配してくれた。今、日本で唯一あの事件の解決を本気で考えてくれてる人だと思う。

その益川さんが定年を迎えて次の三月で刑事を辞めるとのことだった。

最後の灯が消えたような気持ちだった。

「ネオンさん？大丈夫ですか？」

「え？ああ、すみません」

「何か悩みでも？」

「いえ」

今、私はウェブライターの仕事をしている。大学生のときに自分の研究していることがある新聞社の取材を受けた。それがきっかけで新聞を読むようになった。

新聞は短い記事の中での確に物事を教えてくれる。毎日読んでいると少しずつ新聞のちよつとしたコラムを読むのが楽しみになったりした。今まで勉強しかしてこなかった私にとつて初めて「面白い」と思えるものと出会った瞬間だった。

私は大学での専攻や研究内容とはまるきつり違う新聞記者を目指した。親には反対された。でも、もう言いなりなるのは辞めた。

新聞社の面接を片っ端から受けた。でも、箸にも棒にも掛からなかった。

仕方なく妥協案ではあったが雑誌などのライターでもいいやと思いなおすことに。そして、流れ着いた先がウェブ上でエンタメからゴシップ、ドキュメンタリーまでなんでも配信するサイトのライターだった。

私は今「転職人を探せ！」のコーナーを担当している。「転職」して成功した「職人」を探して取材しインタビュー。その模様を月一で配信する。そのライターをしている。

この人生に私は満足している。給料は安いがいがいがあればいいと思っている。

だけど、人に話すのはなんだかイヤだった。ウェブ上では「ネオン」の名前でライターをしている。「佐々木景子」とは別人のつもりだ。

もし、光輔と心菜が今の私を見たらなんて言うだろうか。別になんとも言わないだろう。でも、勉強しかしてなかったあの時の私のイメージとズレてしまうのは目に見える。そのとき気まずさとかを考えると、あの二人と込み入った話をするのは若干ためらいがあった。

「転職人」をたくさん取材していると色々な人生を覗き見することが出来る。そして、色々な人柄と出会う。それは取材していて楽しいと思えるときもあつたし、そうでないときもあつた。

そして、今は後者だ。

早見徹は元々は医者をやっていたそうだ。美容整形が専門。なんでも日本で一番美容整形の腕があるとその界限では噂があつたそうだ。

『見た目が変われば、人生も変わる』

それが早見のキャッチフレーズ。

早見の整形技術の特徴はとにかく仕上がりが自然なこと。たまに「明らかに整形しただろ」なんて人を見かけるが、早見の手にかかるとそういった心配は無用らしい。

二重手術もタトゥーの消去も自然な仕上がりになる。その評判で名を馳せたらしい。芸能人にも早見の手にかかった人がたくさんいるとかいないとか。

そんな彼が医者を辞めるというのがニュースになった。なんの前触れもなく、ラーメン屋さんに転身するとの一報が流れた。

それを聞きつけた編集長が「どこよりも早くうちが取材するんだ」と鶴の一声で今日の取材が決まった。私も休みだったはずの日が「この日しかない」と説得され、洪々早見と会うことになった。

そして、一番の質問「どうしてラーメン屋さんに転身されたのでしょうか」。この答えを聞きにやってきたと言っても過言ではない。それは私も気になりはした。

質問の答えはかなりあっさりとしていた。

「飽きたからです」

「はあああああ!？」と言いかけたがギリギリで耐えた。

「病院を開いて、患者さんの理想の見た目に手術して、で、満足させて帰ってもらおう。その繰り返しでしょ?それがなんかイヤになっちゃって」

早見は笑いながら答えた。

別に人の人生にああだこうだ言うつもりはない。だけど、この答えだけは本当に気に食わなかった。

初対面で「はじめまして」と言ったときから(この人、私苦手なタイプだ……)という危険察知はずっとしていた。それがこの答えを聞いて確信に変わった。

そのあとは今のラーメン屋さんを開いた経緯なんかを聞いた。

仕事のクセで聞いたことをきちんと目の前のパソコンに打つことはしていた。でも、彼の言葉は私の脳内に留まることはなかった。録音もしているし、まあいつか。この人の言葉を聞くことを私自身が反射的に嫌がっていた。

「どうです?是非今度ラーメン屋さんに来てみませんか?ごちそうしますよ」

「ああ、ありがとうございます!是非!」

憎い。無理矢理笑顔で返す自分が憎い。

「あと、ここだけの話なんだけど……」

「はい」

「これは記事には書かないでね」

私はパソコンの手を止める。

「もし周りに整形手術を受けたら、こっそり僕が担当してあげる」

「どういうことですか?」

「いや、今度からは親しい人とか限られた人とかだけ特別に手術をしようと思ってるんだ。何年も先まで予約でいっぱいとかはイヤだけど、少人数ならいいかなって」

「でもなんで私なんですか」

「実は私、ネオンさんのファンなんですよ。一度お会いしてみたくて」

「はあ」

たぶんこのとき私は営業スマイルをやめたと思う。

「実際お会いしてみたら、お綺麗な方で。こうして自分が取材を受けられたのもすごい幸せなことだなと思ひまして」

「……………」

早見は名刺を胸ポケットから取り出す。

「あ、名刺ならさっきいただきましたよ」

「さっきのはラーメン屋さんの名刺。こっちはお医者さんの名刺」

受け取った名刺を見ると、さっきもらった名刺とは違う連絡先が書いてある。

「ネオンさんも美しいですけど、人知れず隠している体の悩みなんかもあると思うんです。もちろん、ネオンさんの周りにも悩んでいる人はいるかもしれない。そういうときは是非僕に声をかけてほしいなと思ひまして」

こうやって洗脳される人もいるんだろうな。逆に感心する。

「こうしてネオンさんと今日出会えたのも運命だと思うんです」

「……………」

「ね？また良かったら連絡くださいね」

「はい」

消え入りそうな小さな声で返事をした。

早く帰りたい、ただそれだけだった。

## 心菜

一時期、毎日のようにニュースで取り上げられたせいで「百白村」といえば莉子ちゃんの失踪事件というイメージがついてしまった。

あの事件のことは誰にも言いたくないし、思い出したくもない。

私の口から事件について話すことは絶対になかった。

でも、この人なら話してもいいかもという人がやっとなってきた。

渚さん。片寄渚。最近はずっとこの人という。

最初、私はこの人のことを警戒していた。この人のことというより、私に関わる全ての人を警戒していた。ちょっとした人間不信になっていたと思う。

中学生の頃はそんなことはなかった。むしろ、人見知りもせずガンガン近所の友達にも話しかけていくタイプだった。

あの日を境に私は変わってしまった。

人と話すのを避け、ずっと一人で生きてきた。

高校にもほとんど友達はいない。一人で学校に行って、一人でご飯を食べて、一人で帰る。そんな毎日。

地元に戻れば近所の人たちが「おかえり」と言ってくれる。でも、それも無視するようになった。なんでかは分からない。次第に誰も私に「おかえり」と言ってくれなくなった。

家族とも最低限の話しかしなくなった。たまに光輔のこととか景子の話をしてくれた。だけど、聞こうともせず無視し続けた。

なんでだろう。なんでそんなことするんだろう。私にも分からない。

また誰かと仲良くなって、心を開いて、信頼しても、裏切られちゃうんじゃないかって。そんな不安があの日以来ずっとある。

別に光輔も景子も裏切ったわけではない。全くない。

でも、神様に引き裂かれたかのようにお別れするなんて信じられなかった。あんなに仲が良かったのに。

先月、私も村を出た。家族とともに東京に行かなくてはならなくなった。

初めて来た東京。人も空気も町も冷たい。私はこの町が嫌いだ。

なんにもせず、なんにも考えず、ただただどうしようもない日々を送っていた。

どうすればいいか分からない私に話しかけてくれたのが渚さんだった。

「困ってるでしょ？」

「……………」

「やっぱり。なんでも言ってくれていいんだよ」

これが最初の会話。いや、会話になってないか。渚さんは私のことを心配して話しかけてくれたらしい。

この日からしばらく経ったある日、渚さんはまた話しかけてくれた。

「私ね、心菜ちゃんみたいはどうすればいいかわかんない人、いっぱい見たことあるの」

私は目は合わせるが会話はしない。

「私は片寄渚。『渚ちゃん』とか『渚さん』ってみんなからは呼ばれてる」

「……………」

「やりたいこととかない？出来ることなら私が一緒にしてあげる」

直感だけどこの人は良い人なんだと思う。この人なら、話してみてもいいかもしれない。

でも、もう何年も開いていない私の心はなかなか開かなかった。

結局、この日も無視し続けた。

次の日も渚さんは来た。

「やりたいこと見つかった？」

無視。

次の日も来た。

「出来ることならなんでもするよ？」

無視。

次の日も、また次の日も、渚さんは毎日欠かさず私に話しかけてくれた。

「こんにちは」

「……………こんにちは」

私は小さな声で返す。渚さんは目を大きく開ける。

「返してくれた！ありがとう！」

「……………」

「どう？何かやりたいことかあるかな？」

「別に……………」

「そっか。何かあったらいつでも言ってみてね？」

「渚さんは私の手を優しく握る。」

「私に出来ることがあったらなんでもするから」

その言葉は心強かった。

少しずつ、少しずつ私は渚さんに心を開いていった。

「……私、秋葉原に行きたい」

「秋葉原？」

「うん」

「行こう！一緒に行こう」

嫌いな東京の町を出歩くことは全くなかった。特に行きたいところとかもないつもりだった。

友達のない高校時代、唯一の趣味がアニメを見ること。深夜にずっとアニメを見て、ひとりで満足する生活。

聞いたことある。秋葉原はオタクの町だって。行ってみたら、好きなアニメのグッズとかがあるかもしれない。

十二月のとある日。町のみんなは忙しそうにしている。

約束通り、私と渚さんは秋葉原へ出かけた。

秋葉原に何があるのか、どこに行けばいいのか、そんなのは全く分からなかった。

行きの電車で渚さんはバッグから紙を取り出す。紙には手書きで細かい字で何か書いてある。

「アニメのグッズならだいたいこの店に行けば揃ってるよ」

渚さんが紙の上の文字を指さす。店の名前、ある場所、どういうグッズが揃っているか、どのくらいの値段のものが置いてあるか。そういった情報がびっしりと書かれていた。

「これ全部渚さんが調べたの？」

「うん。ネットとか友達に聞いたりして」

あとから聞いたのだが、渚さんはアニメや漫画は一切興味が無いそう。私のためだけにこれだけ調べてくれたらしい。

「あ？今『渚さん』って！」

「え？」

「初めて『渚さん』って呼んでくれた！」

恥ずかしかった。自然に口にしてしまった。私は恥ずかしいのを悟られないようにうつむく。

「ありがとう」

そのあと、秋葉原では渚さんの下調べを頼りに色んな店を回った。

私の好きなアニメのグッズがあっちにもこっちにもあった。もう五年くらい前のアニメでもちゃんとグッズが揃っていてびっくりした。なんでもないフィギュアが何十万もしたり、コスプレをしている人がいたり、ずっと驚きっぱなしだった。

何よりめちゃくちゃ楽しかった。久しぶりにこんなに楽しかった。

「大丈夫、疲れてない？」

時折、渚さんが心配してくれる。疲れなんて全く感じなかった。

「大丈夫」

どうしても買いたかったグッズを少しだけ買った。

紙袋を持って帰りの電車に二人で乗る。

平日の夕方、車内は空いている。隣どうしで座った。

「ありがとう、渚さん」

「いいえ」

大丈夫だ。この人は私の味方だ。

「こんなところ見られたら怒られるんだけどね」

「……………」

「悪いことするのってハラハラするね」

渚さんがやんちゃな顔をして言う。

何年ぶりだろうか、こんな幸せな気持ちには。

「なんで私がこんな目にあわなきゃいけないんだろう」

思わずこんな言葉が漏れたしまった。

渚さんは優しく手を握ってくれた。

東京。たぶん、光輔も景子もこの町にいる。どこかで会えるかもしれない。

会えるとしたら会うか？会ったら何を話す？

分からない。

だけど、全てを終わらせなければいけないは事実だった。

光輔

さつき心菜の姿が見えた方面の改札を飛び出る。

なぜだ？なぜ心菜が東京にいる？

もし見つけて本当に心菜だったとして、俺は何を話すんだろうか。そんなあとのことは考

えず、俺は心菜を探した。

まずは心菜を見つけたアパートを探す。電車からの景色を頼りにアパートの位置を特定する。

あった。電車から見たとおり、やっぱり古いアパートだ。



その周りを一周したが、心菜はいなかった。

そのアパートを中心に町中を探す。細い路地やコンビニ、ありとあらゆる場所を探す。少しずつ探す範囲の半径を伸ばしていく。周りには変な人に見えていただろう。

もう二時間くらい探しただろうか。真冬にも関わらず汗をかきほど走り回って探した。けど、黄色いリュックサックの女性は見つからなかった。

次第に自分を疑い始める。

本当に俺が見たのは心菜だったのか？見間違いじゃなかったのか？

音信不通だから、心菜が今どこで何をしているのかは分からない。でも、東京に自分から来るようなタイプの人ではない気がする。あいつは地元に残るんじゃないだろうか。ただの偏見だけ。

だとしたら、東京にいるのはおかしい。

いやでも……。

一回、頭を冷やそう。俺は近くの公園に入る。ベンチに座って、スーツの背広を脱いだ。

最近どうも体の調子がおかしい。急に頭が痛くなることがある。原因は分かっている。益川さんの定年だ。

事件を解決するためには、自分が動くしかない。勝手に責任を感じている。親友の景子のためにも、絶対に自分の手で事件を解決するんだと言い聞かせている。

その焦りが常に生活に付きまといっているから、体の調子が悪いのだろう。仕事にも集中出来ないし、イライラすることも多い。

そんなストレスがついに幻覚を見るまでになったのだろうか。

「ふふ……」

思わず笑ってしまう。もし、そうだとしたらもはや病気だろう。

スマホをつける。電話帳を開く。『泉心菜』の電話番号をタッチする。

「ただいまおかけになった電話番号は……」

当たり前だ。つながるわけがない。

電話帳を下にスクロールする。

『佐々木景子』

あいつだったたら、何か知っているだろうか。もしかすると、女子どうし連絡を取っていたりしないだろうか。

親指でタッチすれば簡単に電話はかかる。

だけど、やめた。どうせ仕事だろうし、冷たく返されるだろう。また今度にしよう。

あの日、見つけた見覚えのない不審な黒い車。あれさえ見つかれば事件は大きく解決に近づくはずだ。

たまに車道をクラウンが通つてときにドキっとする。ナンバープレートを見て、違う車だと確認し、一息つく。

いつまで俺はこんな気持ちを胸に生きていかなきゃいけないんだ。

いつまで黒い車を見るたびにドキっとしなきゃいけないんだ。いつまで景子と話すのに気をつかわなきゃいけないんだ。いつまで心菜と連絡が取れず辛い思いをしなくちゃいけないんだ。

全部、あの事件が悪い。

大きく深呼吸する。落ち着こう。

とりあえず今日は家に帰って、しばらくしたら景子と電話をしよう。

さっき見かけた心菜は……。やっぱり、幻覚だったんだろう。

でも方が一あれが本当に心菜だったら、心菜は何をしていたんだろう。

それだけ確かめて帰ることにした。

さっき心菜がいたアパートに戻る。暗くなり始めていたので、アパートにたどり着くのに時間がかかった。

もし、さっき見た心菜が本物の心菜だったら。ひよっとすると心菜はこの住人か？

俺はアパートの一つ一つの部屋のドアを見て回る。一階に五個、二階に五個、全部で十個部屋はあった。だけど『いずみ』の文字は一つもなかった。

二階の廊下にいたということは二階に用があったのだろうか。二階のドアの周りを一つ一つ念入りに物色する。もう自分が不審者なのはどうでもいい。

どの部屋にも特に心菜と結びつくようなものはなかった。201と204は人が住んでいる気配が全くなかった。あとの三部屋は人が住んでいる形跡はあるが、それしか分からない。

俺は諦めて帰ろうと思った。本音は一部屋一部屋ノックして話を聞きたいくらいだった。でもそんなことをしたら警察を呼ばれかねない。

最後にアパートの裏に回って、バルコニーから部屋の雰囲気だけ覗こう。もうすでに十分不審者の自覚はあったので、罪悪感みたいなものはなかった。ストーカーはこうして生まれるのだろうか。

階段を下りて、アパートを出る。すぐ裏に回ったが下からだと二階の様子は見えない。

クルッと振り返ると道を挟んでコンビニがあった。さっき心菜がいないか探しに入ったコンビニだ。ビルの一階部分がコンビニになっている。

「あれ？」

よく見ると、ビルの二階部分もコンビニの一部だ。店の看板には『イートインあります』と書いてある。さっきは気づかなかったが二階がイートインになっているのだろう。

あそこからなら、アパートの部屋の中を覗けるかもしれない。

俺は横断歩道を渡り、コンビニに入った。何も買わずイートインに入るのは自分のには申し訳ないので、百円のコーヒーを買う。ここのコーヒーは普段から飲んでいてわりと好みだ。ホットコーヒーを片手に二階へ上がる。窓側の席に座って、アパートの方を見る。

やはり、一番端の部屋は誰も住んでいなさそうだ。カーテンも無く無機質な生活感のない部屋が丸見えだ。

その一つ隣は洗濯物が干してあるが男ものだ。おそらく男性が住んでいる。

真ん中の部屋はバルコニーには何も無い。バルコニーを見た感じだと生活感あまり無いが一応薄いカーテンはしてある。どんな人が住んでいるかは分からないが、なんとなく心菜が住んでいるわけではないのは分かった。

右から四つ目やはり誰も住んでいないさそうだ。

左端の部屋はプラスチックのバットやバドミントンのラケットなどが見えた。干してある毛布のサイズから子供がいることが推測出来る。たぶん家族で暮らしているのだろう。

結局、俺の行動はただの変態に終わった。

心菜が住んでいるような、そこにいるようなものは何一つ見つからなかった。俺は見間違いだったと結論づける。幻覚だったんだ。

コーヒーを両手で握って、息を吹きかけて冷まそうとする。猫舌だからそうしないと飲めない。さっさと飲んで帰りたい。もうこのコンビニに用はない。

十分冷めたコーヒーを飲み干し、スマホに通知が来てないことを確認してから、席を立つ。疲れているのだから早く帰って寝ないと。

最後にもう一度だけアパートの方を見た。真ん中の部屋のバルコニーに女性がいた。

「え？」

俺は見間違えたかと思い、一度ギョツと目をつぶる。窓にへばりつくようにして、バルコニーの女性の顔を見る。

女性は不機嫌そうな顔をして、バルコニーから首を出してキョロキョロしていた。その女性の顔は覚えのある顔だった。

「莉子ちゃん……？」

バルコニーにいた女性、それはあの日失踪したはずの莉子ちゃんだった。

景子

しかめっ面で大股で帰り道を歩く。

「こうしてネオンさんと今日出会えたのも運命だと思うんです」

きつつしよく悪い。思い出しただけでムズムズする。

でも、何かあいつに手の平で転がされているような気にもなる。実際、あいつのことが頭から離れない。こうやって、人の心を掴んでいったからこそ、一流の美容整形外科医になれたんだろ。妙に納得もしてしまう。

それでも気分が悪いものは悪い。一人でお酒でも飲んで帰ろうかと思うくらいだ。まだ夕方だけ。

最寄り駅を降りて、薄暗い町を進む。お酒でも飲んでやろうかと思ったが、あいにく私の家の近所は店が少ない。東京で一人暮らしを始めたときはお金が無かったので、都会の中心には住めなかった。駅からはそれなりに歩くと、町はそこまで活気はない。とは言っても、

あの百白村よりかは数億倍ましだけど。

家賃が安い物件を選んだせいで、このあたりはあまりいい評判は聞かない。ネットで検索をかけても「治安が悪い」とか「住みたくない街ランキング上位」とか出てくる。まあ長年このへんに住んでいるが、特に困ったことはない。犯罪に巻き込まれたり、不審者に遭遇したりしたことはない。ただ、どうやって食っているんだろうという怪しいお店が多いのが不気味なのは未だに慣れない。だからあまりこの町のことは詳しく知らない。

ポツッと小さな水滴が頭に落ちる。

「あれ？」

空を見上げると見事に自分がいる周辺だけ、どんよりと黒い雲が覆っていた。

(まづい……)

と思った途端、嫌な予感的中する。雨だ。急にびっくりするくらい雨が降ってきた。

最悪だ。とりあえず、カバンを頭の上に掲げて走る。雨宿り出来そうな場所を探す。

三階建てくらいの雑居ビルに緊急避難する。

一階はシャッターが閉まっていて、何があるのか分からない。でも、人が二人分くらいのスペースがあった。私はそこに入って雨をしのぐ。

外から見たときは暗くてよく見えなかったが、スペースの奥には階段があった。ここから二階や三階へ上がることが出来るのだろう。

見るからに怪しいビルなので、さっさと出たい。私はびしょびしょになったカバンを探る。たしか折り畳み傘があったはずだ。

……無い。あれ？傘はいつも入れているはずなのに……と自問したところで気づく。そうだ、先週同僚に貸したんだった。

「私は傘あるんで、これどうぞ」

そんなこと言っていた先週の自分を憎む。というか、あの同僚はなんで傘をすぐに返さないんだ？普通、翌日には返すだろう。借りパク？

……ダメだ。どんどんイライラが募っていく。全部あの医者の子のせいだ。

東京の狭い空を睨みつける。私のイライラと比例するように雨は強くなっていった。

私は雨に当たらない程度にビルから首をひょっこり出す。近くにコンビニとかカフェはないだろうか？右と左、二回ずつ見たが、私の目当てのものは見当たらなかった。

首を引っ込める。これはどうも雨が止むまで、ここにいなきやいけないみたいだ。たぶんすぐに止むだろう。

と、思った次の瞬間だった。

私は肩に温もりを感じる。一瞬でゾワッと鳥肌が立つ。反射ですぐに後ろを向いた。

そこには髪の毛の長い女の人が立っていた。

「うわあああ！」

思わず叫んでしまう。髪が長いといっても、お世辞にも綺麗な髪とは言えない。ボサボサでまとまっていない。顔色は白い。暗闇の階段から降りてきたようだが、暗さも相まってま

るで幽霊みたいだ。

脳が咄嗟にここを離れろと命令する。

「あの……、すみません！ちょっと雨宿りしてたんです！あの！その！怪しい人じゃないです！」

私はパニックになりながら、この場を立ち去る言葉を探す。

「なんで、もう帰りますね！」

「……………んか」

ん？何か言っている。

「え？」

「……………ませんか」

「ええ？」

二度目も聞き取れない。私はさっきよりも大きい声で聞き返す。

「あの……、良かったらうち寄っていきませんか？」

かなり小さい細い声が聞こえる。彼女なりには精一杯の大きな声だったんだろう。

「え？いや……そんな、遠慮しておきます」

「でも……………」

彼女は外を見る。私も同じ方向を見る。

ガッシャーンと大きな音を立てて雷が落ちた。

「ね？」

「……………」

「あの！私、アトリエやってるんです。こここの二階で。だから、大丈夫。怪しくない。雨が止むまでちょっとだけ、どうですか？ね？」

彼女は精一杯の笑顔を見せる。ちゃんと顔を見ると優しくそうな目をしていた。

彼女は今度は壁の方を指さす。

長谷川すみれアトリエ

FLOWER

と書かれた看板があった。真っ暗な廊下に黒色の看板。そこそこ大きいのに、今の今まで気づかなかった。

私は少し緊張がほぐれてくる。この人はたぶんいい人のような気がしてきたからだ。

「あなたが長谷川すみれさん？」

「はい、そうです」

「ふーん。あ、私は佐々木景子です」

「あ、佐々木さん。はい」

もう一度、私はビルの外に目をやる。全く雨は止む気配はなかった。

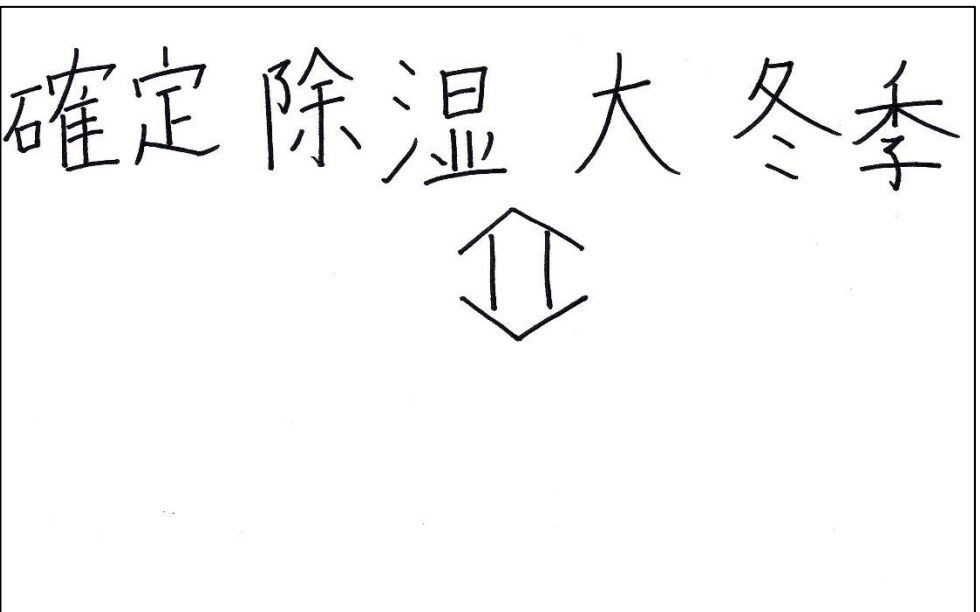
……仕方ない。今選ぶことの出来る選択肢で一番いい選択肢は彼女についていくことだった。

「……じゃあ、少しでも雨宿りさせてもらえる？」

「はい！」

すみれさんは今日一番大きい声で返事をしたあと、クルッと振り返り階段を上り始めた。

心菜



午後六時。まだ肌寒い四月。

中三になって最初の暗号がタツチから出題された。

中二の終わりはずっと私がすぐに暗号を解いた。

「くそ、もうちよつと時間かかると思ったんだけどな……」

そう言うタツチの顔を見たときが一番スカッとする瞬間だった。

「今日は俺の出番なしか」

光輔が教室に戻ってくると、いつも馬鹿にしたような顔で私に言ってきた。それを私は得意な顔で出迎える。タッチにも光輔にも勝ち誇った気分になれる。だから私は一生懸命暗号を解いた。

私たちは中三になった。

新学年、新学期。とは言ってもクラスメートは変わらない。光輔と景子。先生も変わらない。

光輔は最後の大会に向けて、練習により一層力を入れている。窓から眺めると今日も走っている光輔が見える。

景子は受験勉強が本格的に始まって、塾に通いつめている。模試が毎月のようにあるらしく、成績を落とすとお母さんに怒られるらしい。

私は特に何も変わらない。受験のことも考えなきゃいけないけれど、考える気にはならなかった。勉強もほどほどにしていたけど、そこまでやる気も起きなかった。

中二と変わらず放課後は教室で何か暇を潰す日々。今日は暗号部の日。だから、タッチがいつものニヤニヤ顔で必死に暗号を解く私を見ている。

タッチとこうして教室でグダグダ過ごせるのもあと一年か。来年の今頃はたぶん高校生。こんなにもゆつくりとした空気が流れている教室で過ごせるのも中学校までだろう。もちろん暗号部なんて遊びが出来るのも。

「確定……除湿……大……冬季……」

四つの熟語の下には矢印がある。

……ダメだ。分からない。

「ありがとうございます！」

太い声が窓の方から聞こえてくる。陸上部が練習終わりに顧問の先生に挨拶をする声だ。つまり、光輔はもう少ししたらこの教室に戻ってくる。そうなると、私の負けだ。

それだけはイヤだ。久々に光輔に解かれるのは悔しい。焦りが生まれる。

全神経を集中させて暗号を見つめる。

「あれ？その感じは俺の出番か？」

集中していたせいか十分も経ったことに気が付かなかった。

教室の入り口には練習着姿の光輔がいた。

私は負けた。

「ちよっと待って！もうちよっとで解けそうなの！」

「うそつけ。どうせ何も分かってないんだろ？」

どうして分かるの？と聞くまでもなく光輔は私のもとへ近づいてきた。

「確定、除湿、大、冬季……」

光輔はそう発してからしばらく黙り込む。即答とはいかないみたいだ。

「おっ？」

光輔が黙るとタッチはいつも嬉しそうだ。頭のいい光輔を唸らせる暗号を作れたのが快

感なんだろう。

きっと光輔は暗号を解く。私も光輔も解けずにタッチが完全勝利したことはない。まあそのあたりはタッチがちょうどいい難易度で出してくれている。

「……………」

黙っている光輔の顔をじっと見る。他の学年の人からはイケメンだなんて評判らしい。たしかにカッコいい顔はしていると思う。でも、カッコいいなんて本人には絶対に言いたくない。こんなに口が悪いことは他の学年の子たちは知らないだろう。きっと知ったら幻滅する。

景子のせいで私は完全に光輔のことを意識するようになってしまった。それから言うものの、光輔の嫌いなところを出来るだけ探そうとしていた。自分を否定するために。

暴言をときどき言う、がきんちよみたいなことを言う、上から目線、自慢するのが好き。

「分かった、結局最後は自分を否定出来ずに……」

「分かった」

光輔の顔がパッと明るくなる。

「分かったの？」

「行こうか」

「どこに？」

光輔はタッチの方を向く。

「家庭科室に」

どうやら光輔は正解の確認をタッチに行っているらしい。タッチは悔しそうな表情をする。

光輔はちゃんと正解しているみたいだ。

「なんで家庭科室なの？」

家庭科室に移動しながら、私は光輔に聞く。

「四つの単語を対義語にするの。『確定』なら『仮定』、『除湿』なら『加湿』みたいに」

つまり『大』は『小』、『冬季』なら『夏期』になるのか。

「そんで、順番に並べると『仮定』『加湿』『小』『夏期』。かていかしつしようかき」

家庭科室に着くと、光輔はキョロキョロ何かを探す。

「あった」

家庭科室にあった消火器。そこには小さな袋が付いていた。

「家庭科室の消火器が正解ってわけ。でしょ、タッチ？」

「お見事」

光輔はドヤ顔で袋を渡してきた。中身はいつも通り飴玉だった。

「それなあに？」

渚さんが聞いてくる。

私は咄嗟に紙を隠した。

「あれ？見ちゃいけないものだった？」



私は黙る。今隠したのは暗号だったから。

暗号部でタッチからもらった暗号は全てとってある。中学校卒業のとき、捨てようか迷ったが、どうしても捨てられなかった。私にとって唯一の中学校の思い出かもしれない。

「ごめんね」

渚さんはどうやら見てはいけないものを見たと思って、無かったことにしようとしている。別に……別に見られてもいいか。

私は「確定 除湿 大 冬季」と書かれた紙を背中から出す。

「え、いいの?」

私はうなずく。

「何これ?」

渚さんは眺める。

「あのね……」

私は何から話そうか、何を嘘をつかず話そうか、考えながら話はじめた。

光輔

バルコニーにいた女性はキョロキョロと何度も辺りを見渡したあと部屋に戻っていった。そのあと、厚いカーテンを閉めた。中の様子は全く見えない。

俺は信じられなかった。

あのアパートに莉子ちゃんがいる……?でも、なぜ?

もし莉子ちゃんがあの部屋に住んでいるとしたら、心菜はそれを知っているということか?俺が電車から見た心菜が本物だとしたら心菜はこのアパートを知っているということになる。そして、莉子ちゃんとかかしらの接点を持っているということになる。

分からない。まだ何も分からない。だけど、自分の中で少しだけ時計の針が動いた気がした。あの日で止まっていた時計の針が。

俺はイトインの椅子に座り直す。大きく深呼吸をする。落ち着こう、一旦落ち着こう。

あの事件が起きた日を思い出す。山に登ろうと心菜を誘ったとき、心菜は断った。「これが最後だろ」と言っても、頑なに拒否した。

つまり、莉子ちゃんが失踪したであろう時間帯に俺と景子は心菜が何をしていたか分からないということだ。

もちろん、益川さんだって心菜のところには行っただろうし、アリバイなどは調べただろう。

心菜があの日事件に関与していたら、なんて考えたこともなかった。でも、目の前で起きた出来事を見て、そう考えざるを得なくなった。

心菜は悪い奴ではない。それは信じている。

だけど、何か、何かあるんじゃないか?

俺たちと山に登るのを断ってまで、あの時間帯に何をしていたかさえ分かれば、事件を解決する手がかりになるかもしれない。

俺はスマホを取り出す。

『益川正義』

電話帳であと一回タッチをすれば電話がかけられる画面にしたところで指が止まる。

今、益川さんになんて伝えればいいんだ？「莉子ちゃんらしき人物を見つけました」と言っ  
つて、信じてもらえるだろうか。

今日は十二月二十二日。益川さんの定年まであと三か月ある。

それに益川さんは半年に一回くらい連絡をくれる。俺と景子とは定期的に連絡を取って  
いるらしい。

「光輔くん、元氣？」

益川さんはまるで親のように親しく接してくれる。最初に会ったときに感じた印象その  
ままに優しい言葉をかけてくれる。

「ごめんね、結局何も進展はないよ」

そして事件の現状を伝えてくれる。現状と言っても「特に進展なし」としか言われない。  
決まって益川さんは「ごめんね」と謝ってくれる。それは正直かえって辛かったりする。

俺も現状報告をする。東京で就職しましたとか、そんな程度。他愛のない会話をする。

実際に莉子ちゃんの失踪事件を追いつけているわけではないだろう。益川さんだって他  
の事件や仕事はある。だけど、こうして定期的に俺たちと電話をすることで、風化させない  
でおこうとしているのだろう。それだけに俺はなんとしても解決しようと思心に誓ってい  
た。

この微かな情報でもちゃんと益川さんに言うべきだろうか？迷う。

しばらく考えたあと「まだ」連絡しなくてもいいかという結論に落ち着いた。今は焦ら  
ず、もう少し情報を集めよう。俺はスマホを切った。

仕事の前やあと、休日、時間があるときにこのイートインにこよう。そして、張り込むん  
だ。さながら刑事みたいなおこなすことをするが、事件解決のためにはそのくらいしな  
いといけない。益川さんが辞めるまでになんとしてでも、事件を解決する。改めて、そ  
う自分に誓った。

よく見たら「イートインスペースでの通話は遠慮ください」と書いてある。当たり前だ。  
よかった、あのとき勢いで電話をしなくて。

とりあえず、夜になったし早く帰ろう。俺はコンビニをあとにした。

「ただいま」

家に自分の声だけが響く。部屋は電気はついていない。

テーブルの上を見ると、夜ご飯と書き置きの手紙があった。

「疲れたので先に寝ます 夜ご飯はチンして食べてください」

またか。またこれだ。

最近、妻とろくに話せていない。結婚と同時にこの家に一緒に住み始めて半年くらいにな

るが、早くもすれ違いみたいなものを感じている。

別に仲が悪いわけではない。けんかもしていない。妻が忙しいのは分かっていたし、それでもこうしてご飯を作ってくれるだけ本当にありがたい。

だけど、夫婦として本当にこれからずっとやっていけるのかなって、ここに来て急に不安になり始めた。

このところ、あの事件のこともいつも頭の片隅にいて、俺もかなりしんどい。妻も妻で仕事関係で忙しいみたいだ。

俺がちよっとストレスでイライラしているときに限って、妻は調子のいいことを言ってくる。逆に俺が「ごはん美味しかったよ」なんて言っても「そう」って素っ気ない返事が返ってきたりする。それが最近特に多い。

夫婦で同じ家にいるってことは、そういうことなんだろう。だけど、これでいいのかと葛藤する自分もいた。

冷めきったおかずを電子レンジにいれる。

俺が冷めているのかな。俺がもっといつもニコニコすれば、妻も元気になるだろうか。

そんなこと誰かに相談出来れば、楽なんだろうけど、あいにくそんな相手はいなかった。

会社の同僚や上司とは仲は悪くはないが仕事の話しかしない。高校や大学の友人もお互い予定が合わず、なかなか会えない。

心菜や景子と今も仲が良かったら、そんな話も出来るかな。

俺は電子レンジからおかずを取り出し、ご飯を入れる。

奥の部屋に妻はいる。こんなに近い距離にいるはずなのに、すごく遠くにいるような感じがした。

テレビをつけ、一人モソモソとご飯を食べる。

テレビでは歌番組をやっていた。今、歌っているのは最近流行りのアイドルだ。名前は「ラブ&メロディー」。なんでも、韓国や台湾の国籍のメンバーがいて、多国籍アイドルとして人気を博している。

「全員、おんなじ顔してるな……」

昔からアイドルの良さは分からない。大人数のなんちゃらグループが活動休止するとかメンバーが脱退するとかニュースになってるのは見るけど、全く興味が湧かない。

今歌っている「ラブ&メロディー」は会社に一人ファンのやつがいて、そのせいでグループ名くらいは知っていた。通称は「ラブメロ」らしい。いい歳した大人がこんな子供に熱狂するなんてくだらない。

白ご飯、魚の煮つけ、きんぴらごぼう。魚から手をつけるのが自分流だ。

話し相手もない。歌番組もつまらない。俺はスマホをいじりながらおかずにつける。行儀が悪いけど、一人で食えることが増えて癖になってしまった。

「ん？」

サイトを閲覧していると、なんでもない広告が目に入る。

「これ、いいかも……」

景子

暗い階段を上ると、扉があった。あとは三階へ続く階段だけ。扉には下で見た看板と同じものが貼られていた。

すみれさんは扉を開ける。中は明るかった。少し眩しい。

「すみません、散らかってます」

十畳くらいの部屋の奥側半分を見ると、たしかに彼女の言う通り散らかっている。だけど、手前半分は綺麗に片付いている。まるで境界線が引かれているみたいだ。

手前の綺麗な半分は中央に小さなテーブルと椅子があった。その周りには壁一面に作品が飾られている。額縁に飾られているものや、キャンバスのまま置いてあるもの、彫刻みたいなものもある。

散らかっている奥半分はすみれさんの作品を作るスペースのようだ。人一人がすっぽり収まるスペースに椅子が置いてある。その周りは描きかけの絵やら絵の具やらバケツやらがとにかく取っ散らかっている。

「こちらへどうぞ」

すみれさんは手前の綺麗なゾーン中央にある椅子を引いた。

「ありがとうございます」

私は座る。座るや否やすみれさんは次の質問を私にする。

「コーヒーと紅茶、どちらがいいですか？」

「え？……いや、そんな！雨宿りしただけですから！」

「でも……」

「本当に大丈夫です。本当に。雨が止んだらすぐに帰りますんで」

「そうですか」

すみれさんはどこか寂しそうに答える。私は何か悪いことをした気になる。悪いことは何もしていないはずだけど。

今度は私が聞く。

「これ全部あなたの作品なんですか？」

「あ！はい！」

花の絵。海の絵。人の絵。何がモチーフなのか、どこの景色なのか分からない。けど、すみれさんの描く絵を見ると不思議と懐かしい気持ちになった。

「素敵な絵ですね」

「……ありがとうございます！」

「全部、ここで描いてるんですか？」

「はい、そうです」

そのあと色々質問した。すみれさんはここを格安で借りているらしく、ここが仕事場だそう。毎日、ここで絵を描く生活をしている。

「でも、こんなこと言ったらあれだけど、こんなところお客さん来るの?」

「四人目ですね。佐々木さんで」

ほう。こんな暗いアトリエに今日四人も来ているらしい。世の中色んな人がいるもんだ。

「今日来たお客さんは何か買って行ってくれたの?」

私の質問にすみれさんは答えない。私の言っていることが理解出来ないような顔をしている。

「あれ?」

「はい」

「だから、今日来たお客さんは何か買って行ってくれたの?って」

「今日?」

ん?会話が噛み合わない。

「え、だって四人目のお客さんって言ってたじゃない」

「……ああ、あれは今年です。『今年』四人目って意味です」

今度は私が理解するのに時間がかかる。

「今年って、二〇一八年?」

「はい」

「今年って、もう十二月よね?」

「はい」

「それで四人目なの?」

「はい」

すみれさんは間髪入れず返してくる。間髪入れて欲しいところなのに。

「え?あなた大丈夫?」

思わず本音がこぼれてしまった。

だってそうだ。今年ももう終わりというのに、まだ四人しかお客さんが来ていないという意味でしょ?だとしたら、絶対に食っていきけるわけがない。それとも、この作品本当は、めちゃくちゃ高価なのか?たしかに値段は書いていない。というか、そもそも私はお客さんではないぞ?

「まあ、貯金を切り崩してなんとか生きてます」

「……………」

そのあと私は時間を忘れて根掘り葉掘り聞いてしまった。

まずすみれさんは三つ年下の二十一歳。高校を卒業したあとすぐに一般企業に就職したらしい。だけど、ワケありで三か月で辞めることとなり、そのあとはフリーターとしてアルバイトを点々としたらしい。

そして、生活を切り詰めてなんとか貯めたお金で、ここのアトリエを開設。二十歳からこ

「でこの生活をしているらしい。今はアルバイトはしておらず、収入はゼロ。」「…………え、なんで会社辞めちゃったの？」

この質問にはさすがに答えにくそうにしていた。

「あ、ごめん。言えないなら、言わなくていいよ」

すみれさんは無言で長袖をめくった。隠れていた右腕があらわになる。そこには

Tomoyuki

と筆記体で描かれていた。いや、彫られていた。見た瞬間に分かる。タトゥーだ。

「え？そのトモユキってのは誰よ？」

「当時付き合っていた彼氏です」

なんでも社会人になって一週間で同僚の男に告白されたらしい。すみれさんいわく告白されるのは初めてで断り方も分からなかったそうだ。

で、その彼氏の病的な束縛にあつたらしい。二十四時間どこにいるか常にGPSで管理される。少しでも怪しい動きをしたら、速攻で電話がかかってくる。彼氏の家に強制的に同棲させられてずっと監視されていたらしい。

男性と付き合ったことがなかったすみれさんはそれが普通だと思いついていたそうだ。

そしてある日、お互いの名前を体にタトゥーを入れようという話になった。すみれさんはそれも断り方が分からなかった。結局、今の腕になったというわけだ。

「じゃあ、トモユキさんの腕にはすみれさんの名前が彫られているの？」

「いや、それが……。裏切られたんです」

「……………」

「彼、タトゥーをいれなかったんです」

結局、その彼氏とは別れた。そのいきこぎが原因で会社も二人でクビになった。残ったのは腕の彼氏の名前のタトゥーだけらしい。

外はすっかり雨が止んでいた。そんなことどうでもよかった。

「あんた、馬鹿なの！？」

「……………」

こんな馬鹿初めて見た。いや、なんで？ずっと「なんで？」の連続。ツツコミどころしかない。

タトゥーを隠してアルバイトをしても、すぐにバレてしまうらしい。夜の仕事もしたそうだが、さすがに彼氏の名前が彫られていたら仕事にならない。バレるまで隠してアルバイトをして、バレたら次のアルバイトをする。そんな生活を一年半してお金を貯めたらしい。

「それがなんでこのアトリエに行きつくのよ？」

「いや、このままどこにも就職出来ないし、アルバイトも出来ないし。だったら自分の好きな事して生きていこうと思って」

「このアトリエで食っていけると思ったの？」

すみれさんは恥ずかしそうにうなずいた。

馬鹿だ。今まで出会った人の中で一番馬鹿だ。断トツだ。

「……無理だと思うよ。このまま生きていくの」

なぜか分からないがすみれさんをまともな生活に導かないといけない気がした。今私の言葉ですみれさんをやり直せるようにしよう。

「貯金はまだあるの？」

「二万円くらい」

「それが全財産？」

すみれさんはこっくりうなずく。どうして、それで生きていけると思ったのだろうか。

私は名刺を取り出す。すみれさんに渡す。

「ネオンさんって、あの『転職人を探せ!』の？」

「そう」

「うそ……、いつも読んでます。スマホで」

「ありがと」

私は椅子から腰をあげる。

「また来るわ。あなたのことは放っておけない。だから必ず来る」

「……………」

「そのときまでこのアトリエ続けててね」

「はい」

私は雑居ビルを出た。雨が降っていたとは思えない、綺麗な夜空が広がっていた。

一つだけ、すみれさんを救う方法を思いついた。私の人脈を辿れば、ひよっとすると彼女の生活を救えるかもしれない。

なんでそこまでするのかは私にも分からなかった。でも、あの大馬鹿は私が救わないとまたいつか馬鹿をやらかすだろう。私はこう見えても世話を焼くタイプだ。

問題はあのタトゥーだ。

これも一つあてがある。残念ながら。

そう、早見徹。今朝会ったばかりの天才美容整形外科医。あいつならあのタトゥーをきれいさっぱり消すことが出来るんだろう。

でも……、またあの気色悪い医者に会わなきゃいけないのか？

思い出すだけで頭が痛くなった。

心菜

「ふーん、タイムカプセルか……」

私は所々嘘をつきながら自分の中学時代の話をした。事件の話はしたくなかったし、光輔

や景子の名前も出していない。

でも、中学の同級生二人とタイムカプセルを埋めた話はした。

「それ、掘り返さなくていいの？」

それは私も思っていた。あのタイムカプセルどうするんだろうって。

いつまでもいつまでも、あの日の出来事から目を背けちゃダメだ。きちんと全てを終わらせなければいけない。それは分かっている。

だけど、今更あの二人に会って何を話せばいいのだろうか……。

「ちゃんと言ってみたら？タイムカプセルを掘り返したいって」

「……………」

方法は一つだけある。実家から持ってきた小さな頃に使っていた自由帳。そこに景子の実家の電話番号が書いてある。それが繋がれば、景子のお母さんと連絡が取れる。そして、景子の連絡先も手に入れることが出来るだろう。

本当なら掘り返すのは再来年。それを早めてもらうことになる。私の都合で。そんな話聞いてくれるだろうか。

「心菜ちゃん」

渚さんが私に優しく話しかける。

「全部正直に言ったほうがいいんじゃないかな？そしたら……」

「イヤだ！」

私は大きな声を出してしまう。渚さんも口をつぐむ。

「ごめん」

「私のほうこそおっきな声出してごめんなさい。でも、イヤなの」

渚さんはうなずく。

「…………でも、連絡は取ってみようと思う」

「そっか」

しばらくしたあと、私は景子と連絡を取ることを決心した。渚さんはいないところで。

スマホの電話帳を見る。自分の家族以外誰も載っていない。当たり前だ。誰とも交換していないんだもん。

ダイヤルの画面に移動する。自由帳を見ながら番号を一つ一つ押す。そして、発信ボタンを押す。

スマホに耳を当てると「プルルルル」と音が鳴っている。どうやら、まだこの電話番号は使われているらしい。

「はい、佐々木です」

出た。繋がった。

「あの…………」

声が出ない。緊張する。なんて言えればいいか、あんなに練習したのに、うまく話せない。

「…………どなたですか？」



スマホから怪訝な声がある。まずい、怪しい人だと思われる。

「泉です。泉心菜です」

しばらく沈黙が続く。

「心菜ちゃん？本当に心菜ちゃんなの？」

「はい」

「まあ！久しぶりねえ！元気？」

がらっと声色が変わる。あの日のままの景子のお母さんの声だ。

何年も話していなかったのに、景子のお母さんはすんなりと私の話を聞き入れてくれた。

そのあと、景子の連絡先を教えてもらった。景子のお母さんとLINEが繋がり、そこから

景子のLINEも手に入れた。

「またいつでも電話してちょうだいね」

「はい、ありがとうございます」

電話を切る。嘘をついたりもしたが、とにかく景子と連絡を取る一歩手前まで来れた。

私はその勢いのまま、LINE通話をかける。今なら、話せるはず。

発信中の画面が光る。けっこう待ったがなかなか繋がらない。忙しいのだろうか。

と思った次の瞬間、通話中の画面に切り替わる。

「心菜！？」

開口一番、景子は大きな声で聞いてきた。

「心菜？本当に心菜なの？」

「……うん」

「あんた、今までどこで何してたのよ！」

「いやあ、えへへ」

笑って誤魔化す。景子も驚いてはいるが、電話越しの声はあの日と変わらない。

私は景子の連絡先を手に入れた経緯を説明する。今まで何をしていたのかと何度も聞か

れたが、それは笑って誤魔化した。

「え、もうなんなの？なんか用なの？」

少し機嫌が悪くなったのが、すぐに分かる。

「いや、そのさ……お願いがあつて」

「お願い？」

「うん」

「何よ」

私は一息つく。

「タイムカプセル埋めたじゃん」

「ああ、埋めた埋めた」

「あれ、掘り返したいの」

「……え、いつ？」

「なるべく早く」

「はあ？」

そりやそうだ。自分の細かい説明抜きでそんなこと言い出したら「はあ？」と言いたくなるだろう。

「え、心菜覚えてないの？あれ、十年後に掘り返すんだよ？掘り返すのは二〇二〇年ですよ？」

「うん、だからお願いなの」

「なんで？」

「……………」

言えない。言いたくない。

「あんた、どこにいるの？今」

「………東京」

「ええ！？なんでそれを早く言わないのよ」

「ごめん」

「分かった。私も東京にいるの。またLINEするから、どっかで会おう。そのときに詳しい話を聞くから。なんか電話じゃ言い辛いことあるんでしょ？で、おどおどしてるんでしょ？」

すごい。さすが景子だ。当たっている。

「うん」

「じゃあ、また連絡するから。あと、光輔とも連絡とってないの？」

「うん、取ってない」

「光輔の連絡先も送るから。ちゃんと東京いること言いなよ、自分で」

「……………」

この日の電話は終わった。結局、景子とは日を改めて会うことを決めた。

だけど、会ってどうしようか。そのときは全部話さないといけない。

あの日の事件のことも、まだ言っていないことがある。

莉子

テレビでは私のニュースが流されていた。

正直、怖かった。本当に自分のやったことがバレないのか。未来永劫、絶対にバレないのか。とてつもない不安に襲われる。

「ちっ、車見られてたか」

彼は悔しそうに呟く。

私たちが逃走に使った車は彼が盗難したものらしい。それすらも見られないように計画をしていたみたいだが、一つ誤算があったようだ。

それにニュースでは完全に車種とナンバープレートが特定されていた。

「ねえ、これ本当に大丈夫？」

「大丈夫」

そうは言うものの、少し焦っているような感じはした。

それにしても、どうやって車種やナンバープレートまで特定したんだろう。

車が特定されたせいで、一連の騒動は『誘拐事件』が濃厚と報道されていた。計画ではそんなはずではなかった。

「とりあえず、明日、頑張ろうな」

「うん」

私は彼が用意したベッドで眠りにつこうとした。だけど、案の定全く眠れなかった。

バレたらどうなるんだろう。バレたらどうなるんだろう。

そればかりが頭の中を反芻する。

突然、頭を撫でられる。彼だった。

「眠れない？」

「……うん」

「絶対に見つからないよ。見つけっこないもの。安心して」

「…………」

「おやすみ」

「おやすみ」

私は無理矢理目を閉じた。